おめでとう！悪役令嬢は悪のカリスマに進化した！

ギブソン・ガール

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪役令嬢になったので、攻略キャラをボコボコにする話。

目次

#1 ―― 1
#2 ―― 7
#3 ―― 13
#4 ―― 20
#5 ―― 26
#6 ―― 32
#7 ―― 39
#8 ―― 45
#9 ―― 51
#10 ―― 57
資料：一般魔術教養 ―― 64
#11 ―― 70
#12 ―― 76
#13 ―― 82
#14 ―― 89
猟奇的で暴力的で狂気的な本能の残滓によって発生した、とある少女の無意識内の二重思考的な混沌なる異常思考 ―― 97
#15 ―― 105
#16 ―― 112

#1

ぼんやりとテレビの画面を眺めながら、ボタンを連打する。
金髪のイケメンがコロコロと表情を変えていくその様は、かなり滑稽だ。
メッセージウィンドウに並ぶ主人公への、気色の悪い何処かで使い回され擦られ続けた薄っぺらい愛の囁きが、濁流のように高速で流れていく。
ときおり頭の片隅に現れる「俺、何してんだろう」という邪念を振り払いながら、一心不乱にイベントを飛ばしていく。
『ラバーソウル2』
クソッタレ姉貴に強制的にさせられている乙女ゲーだ。
乙女ゲーといっても、このゲーム、前作の『1』と違って実は結構歯応えのあるＲＰＧ要素がある。
様々な魔法を組み合わせる戦術や、いやらしい性質の中ボスなど、ＲＰＧ好きでも楽しめるゲームデザインとなっていて、そのためＲＰＧ好きな男ゲーマーたちがこぞって乙女ゲーを買うという奇妙な光景がゲーム屋で見られ、ＳＮＳでちょっとした話題にもなったという。
が
そんなことは妖怪二次元ババアことクソ姉貴には関係のない話。
さっさと推しのスチルとイベントが見たい姉貴からすれば延々とレベリングしたり攻略パターンを構築するのが苦痛なのだ。
しかし好感度上げやシナリオ進行にはレベルやボスの撃破が必要ということで、普段友だちと外で遊ばず大学にも行かずに部屋に篭ってゲームばっかしてる俺に白羽の矢が立った。
「やれ」
「はい…」
たったの2文字で俺のゲームライフにスクランブル。
しかしそれが弟の宿命なのだからしょうがないのだ。
そんなわけで延々とクソみたいなノベルパートをやらされている

が、正直苦痛だ。
金髪のイケメン野郎は、やれ本当の愛だの、血が全てではないだのあーだのこーだのゴチャゴチャ抜かしてやがる。
ブサイクで姉貴に逆らえない俺からすれば、コイツの戯言なぞ、テッシュ未満の薄っぺらい三流猿芝居だ。
他のムキムキマッチョ野郎やロン毛メガネ根暗マンも腹立つ。その自信たっぷりなキラキラ笑顔（笑）と、僕は不幸なんです～世界で一番可哀想なんです～とでも言いたげな辛気臭い面。
それと所謂子犬系というのだろうか、男のくせに主人公に尻尾振って媚び諂ってくる後輩男子。マジでキモい。
自発的に始めたゲームではないので、どうしてもシナリオが楽しめない。
主人公の女の子も、立ち絵でもイベントシーン内でも目元が影や前髪で隠れていてイマイチ可愛くないというか、ビジュアルがわからない。さらには選択肢のセリフはどれもこれも少し的外れで、本当に攻略キャラと面と向かって向き合っている感じでもない。
ここまでやってきて思うのは、なぜＲＰＧ部分は無茶苦茶素晴らしいゲームバランスで作られているのに、シナリオがイマイチなのか。
したり顔で口説いてくるイケメン共をぼんやりと眺めながら、なるべくこの虚無に等しい時間を、心の中で毒を吐くことで耐える。
すると急に、やたら前髪を大きく膨らませ、バチバチの厚化粧に、死ぬほど利便性の無さそうなクソデカいドレスを纏った、さも私は悪女でございますって感じの少女が現れた。所謂中ボスの悪役令嬢という奴だ。
コイツもコイツで色々と腹立つ。名門の家に生まれ、成績優秀という設定の癖に、主人公への嫌がらせは幼稚で杜撰で短絡的、挙句それを糾弾の材料にされてみっともなく焦りまくる。
事あるごとにバカで下品な口調で主人公を煽ってくるので、普通にノベルパートで嫌な気持ちになる。
女の嫌な所（まるで姉貴のような）の凝縮エキスみたいな性格で、それに加えて小学生男子並みのオツム、トドメとばかりに自己中心的で

保身に走るお猪口以下の器。
やはり俺は根っからのゲーマーなのだろう。
ＲＰＧ部分が素晴らしく、イラストや操作性も抜群という長所に不覚にも魅力を感じてしまったが故に、このシナリオやキャラの動かし方といった面に、物凄い勿体無さを感じてしまった。歯痒いと思ってしまった。
正直このシナリオはクソだ。攻略キャラにも主人公にも惹かれない。
もし、この悪役令嬢がこんなしょうもない小悪党ではなく、悪のカリスマのような、魅力的な悪役だったのなら、この物語はもう少し面白くなったのか知れないが……

◆

公暦１９８４年、王国立アバー＝ガーヴェニー高等魔法学院は、第１０１期生の入学式を迎え、豪奢な飾り付けのされた大広間には、全校生徒と全教職員が集っていた。
荘厳な雰囲気に気圧される新入生たちの、どこかソワソワと落ち着きない姿を微笑ましく見守っていたアリス・モンタギュー学園長は、ふと一人の新入生に目が付いた。
そこらの女生徒よりも少し短い黒髪を整髪料で整えている。前髪は持ち上がり後方に流れ、両横の髪も後ろに流れている。後頭部には肌色の一本線。たしかその髪型は下町に屯する不良少年に流行っていた、と記憶している。
中々面白そうな娘だと、自らの目が品定めをするように自然と鋭くなっていく。
「ふむ…」
「…学園長？」
何やら横に座っていた教員が訝しげに小声を漏らすが、あえて無視した。
それよりもあの少女を『観る』ことが大切なような気がしたからだ。

細身な男子在校生と変わらぬほどの体躯。揺れない眼光と不動の鼻っ柱。冷徹な顔貌。革製の外套。雑に結んだ襟締。それらは不思議と格好がついている。
勿論名前は把握している。
彼女の名は
『リーゼ・ポンパドール＝ダックテイル』。
ポンパドール家は代々、中央魔法院の結界術師や魔薬取締局員を輩出しており、その家格はまさしく名門といえる。
そしてダックテイル家も、その一族の者には一流の決闘士が多い。大昔、かつて9年にも渡って続いたという亜人戦争でも、ダックテイルの一族は最前線で奮闘し多くの勲章を国王に賜ったという。
リーゼはそんな魔法院に仕える静かなる臣下の血と、武門から受け継いだ荒き血を持つ少女。
今もなお、凛とした態度と容貌で式典を受け止めるその姿勢は、高貴な家格にも負けぬただならぬ雰囲気を醸し出していた。
「…もうすぐ挨拶ですよ、学園長」
「…おお、すまぬすまぬ」
改めて新入生たちを見回す。今期は中々気骨のある子が多そうだ。
適当な挨拶を考えながら、何度も味わってもなお慣れることない不思議な高揚感を胸に仕舞い込んだ。

◆

鈍い音が、中央棟の影に木霊する。
力一杯に振り下ろされた金属製の杖（腕ほどの長さであろうか）は、寸分の狂いなく倒れ伏す大柄な男子生徒の頭に叩きつけられる。
「ここで今回の特別授業のお浚いといこう」
いかにも理路整然といったような、威風堂々とした、年若い少女にしては低く嗄れたその声は、まるで往年の教授のようで、それによって、余計にこの鉄火場に似つかわしくない文言が、陰に覆われた場を支配した。

「闘争における最も重要な要素とは、このように、大柄な体型や筋肉、様々な状況に対応できる魔術の手札、あるいはそれらを自在に駆使し得る技量ではない」
淡々と同じ声量、抑揚で放たれるそれは、何気ない日常会話のようであって、とても、とても、不気味であった。
「強靭な意志だよ…分かるか？……敵対した相手を打ちのめし、その叛逆心をへし折る…あるいは命ごと抹消する、と口にするまでもなく俊敏に行動に移す、示威行為として表現しない、愚鈍な君にも分かるように言うとするならば、まさしく内なる殺意なのだよ」
絶え間なく言葉が紡がれる間にも、油断なく、同じ拍子でその杖は、狂気は、或いは凶器が、振り下ろされ、振り下ろされ、振り下ろされ、初夏に降りしきる豪雨の様に、男子生徒の精悍な顔貌を歪めていく。
「君は闘争に懸ける意志を侮ったが故に、１つ下の女生徒に叩きのめされたのだ」
「…ぁ…や、ゃ…い…っ！…」
「眠いのか？それとも、許しを乞いたいのか？」
それは嗜虐的とも取れる言葉、しかし、それにしてはあまりにも無感情であった。
「そして君はこの屈辱を誰にも共有できない、なぜならば君はか弱い女生徒を襲った獣であり、それを通りすがった勇敢なる女生徒に制裁された、沈黙すべき報いを受けた加害者なのだから」
鈍音が響く。
その度、影の中に居るというのに、身を抱いて震えを自ら宥める女生徒が、目にいっぱいの涙を溜めながら、視線を泳がせた。
「すまないな、悍ましい様を見せて」
鈍音は鳴り止んだ。
同時に杖を振った断罪者は、その上等な生地を汚すことに対し躊躇なく膝を折り、今もなお震える女生徒と目を合わせた。
「無理に喋ろうだなんて、考えなくていい」
「…ひ、あ、あ、その、あ…っ……」
「ゆっくりと、息を吸って、息を吐くことだけを考えるんだ」

不思議な光景だ。
陽の光に当たらぬ影の地で、頭や額から血を流す男子を尻目に、震える華奢な少女に、断罪者は恭しく膝を折っている。
奇妙であった。
「私はね、君がとても優しい人だと思ったんだよ」
それは、機械じかけのような声では、決して無かった。
「何故なら君は、本来その純潔を嬲ろうとした悪漢が伸される景色を見てなお、爽快感も高揚感も感じていない」
「…そ、そん…」
「君は、優しい人だ」
その時震える少女は、安心してしまった。
異質な空間であっても、自らの矜持を、常識を、感性を保証されたのだと思った。
「どうか、名を教えてほしい」
「べ、ベアトリックスです…ベアトリックス・セネル…」
「ではベディ、と呼んでいいか？」
今の今まで、頑なだったその表情が、薄く弧を描いた。
「君は優しい子だ、友だちになりたい」
ベアトリックス・セネルは頷いた。
心底には打算も保身もなかった。
ただ怯えていただけの自分が、少し嫌いになりそうだったが、その言葉に救われたからだ。
怯えていたのは、間違いではなかったのだ、と。

＃2

アリス・モンタギュー。公暦１９１２年生まれ。御年７２歳。
趣味は有名な銘柄の茶を収集すること、自宅の庭園に香草を育てること、旧友たちと文通すること。
王国立アヴァー＝ガーヴェニー高等魔法学院の学園長であり、主な校務として指導要録の編集や施設設備の安全管理、教員会議の主宰、推薦書の精査および承認、校外行事の責任者、新規教員の誘致、有志・個人研究室の予算案会議と監督である。
少なくともこの学園における全ての功績と失態は彼女一人の責任であり、未来の礎を築く聖職者の頂点としての責務を必要とされる職務に就いている女傑である。
しかし、その容姿ははっきりと断言するのならば、異様であった。
７２歳。肉体が老衰し、生理的な機能が低下していく年齢であるにも関わらず、肌には皺がなく赤みと水々しいハリがあり、髪も所々白髪混じりではあるが艶がある。
丁度頭一つほどある三角帽子の黒いつばの影が覆う両目は、いつまでも若々しく爛々と緑色に輝いていて、ダボダボの着古されたローブは、何も知らぬ者から観れば微笑ましく映るのかも知れない。
そんな彼女の執務室に、控えめに扉を叩く音が舞い込んできた。
鈴が転がるような声で許可を出すと、灰色の背広を着た、痩せぎすの男がいくつかの書類を手に入ってきた。
「ジェームズ・ホプキンス君の退学届です」
前置きをすっ飛ばし唐突に話題に入るその姿勢にちょっとばかり辟易とした気分になった。
「驚いたな」
正直な感想を述べても、その鉄面は微動だにしない。
「自主退学する理由は言いたくないとのことです」
「心読術は？」
「４年前から本人の意志を尊重する方針に変更なされたのは、他ならぬ貴女だと記憶しています」

手のひらに顎を乗せ、ダメ元で言ったことに対する嫌味を聞き流しながら、退学届を出した生徒についての自らの記憶を掘り下げていく。
ジェームズ・ホプキンス。２年生。決闘士倶楽部所属。
選択科目は、詠唱術、錬金術、紋章術。
実技に重きを置く科目には強いが、いかんせん座学に弱かった。快活な性格からそれなりに友人も多かったが、短絡的で粗野な一面もあってか敵も味方も作りやすい生徒であった、と奥底の記憶の引き出しを開けていく。
「出来るのなら、最後通牒として直接、面談をしたいのだが」
「本人は既にご実家に帰省しています」
「まいったな、こりゃ」
こういう事例は過去にも山ほど経験しているが、どうも悲しい気分になってしまうらしい。その端正な顔立ちが、僅かに歪んだ。
手渡された書類を見つめながら、判子に伸びそうな手を止める。
「…療養室の使用履歴には、外傷の治療と書いてあるが」
「黙秘しています」
「眼光灯の記録は？」
「因果関係のありそうな映像は記録されていませんでした」
小さな手のひらを向け、参ったとばかりに溜息を漏らし、黄金の判子を書類に押し、椅子をクルリと回して窓を眺めた。
ドアが閉じる音を背に、幸先悪いのぉ、と小さな鈴が転がる様な声が、執務室の中で小さく木霊した。

◆

俺は転生した。
前世の名前は覚えていない。
灰色の街で黒い背広を着た男たちと共に、いつまでも同じ景色の中を歩いた記憶がある。
５０文字の基礎的な文字と、多数の意味を持つ複雑な文字を操り、

この世界よりも科学が進歩した世を生きた。
今世の俺が生まれた家はどうやらかなりの名家だったらしく、家族以外に乳母や使用人を見かけることが多かった。
季節が６度過ぎる頃、俺は何故か絶え間ない行き場のない怒りと共に、前世を思い出した。
最初は何かしらの精神疾患を疑ったが、６年の人生経験では思い浮かばないほどの未来への不安と、本や新聞を漁るという具体的な解決法を、誰からも指摘されないまま思いついた自らの異常性を考慮し、ぼんやりとしていて、はっきりと明言できない記憶を持っていた事もあって、俺は自らを転生者だと仮定した。
この異世界について整理するべく、俺はメモ帳に出来るだけの前世との相違点の情報を詰め込んだ。
・この異世界は、電気エネルギーの代わりに魔力と呼ばれる個人に宿るエネルギーによって発展してきたこと。
・俺が生まれたこのオウェル王国は、立憲君主制ではあるが、議員内閣制を採用しており、国王や女王は権能が儀礼的になっていること。
・国際魔法協議会によって、禁術を無効化する結界が、原則として公共施設ならび公道に張られていること。
・公暦１９２２年の亜人戦争によって、数多くの発明や個人の権利、尊厳が見直され、更にその後、亜人の尊厳が尊重され差別的な意識の撤廃が世俗の流行となったこと。
・貧困層の人間、亜人、半亜人たちは魔力を用いない科学や技術を用いた非魔術事業を営む傾向が多いこと。
これらを前世で使っていた言語で書き、鍵のついた引き出しに仕舞った。
豪奢な自室には、およそ名家らしい絨毯や椅子、天蓋付きのベッドがあったが、個人的に最も興味をそそられたのは、本棚であった。
絵本、童話、寓話、過去の新聞、歴史書、常用魔術について、社交界における礼儀、家庭でできる簡易的な錬金術、１９７４年版禁術集、杖のカタログ、絵葉書、誰かからの手紙、紋章図鑑、霊薬のレシピ、魔

獣の飼育本。
本棚自体は整理されているが、雑多に様々な本ばかりで、外で走り回ったり、家の者とのおしゃべりに無関心であると自覚していたので、とにかくそれらを読み漁り続けた。
どれもこれも新鮮で面白いと思った。
今世では、家族との会話も、外界での遊びも、水溜りも雪も、何もかも新鮮に感じず、やはり遠く遠くのかつての生涯で経験した事であったから、全くの経験のない事が書かれた本は、人一倍面白く感じた。
特に頁を捲る手が止まらなかったのは、１９７４年版禁術集だ。
結界によって発動が禁じられたそれらは、国際魔法協議会と、それに加盟している国の高等魔法院が制定・管理しており、その職務に就いた者は結界術師と呼ばれている。
しかし、結界も万能で絶対の効力があるわけでもなく、禁術に手を染めた者は皆、卓越した魔術の知識や技量を持ち、焚書されたはずの書物の複写などを利用し、結界の届かない私有地で指定された禁術とは違った詠唱や方法で効果を再現する魔術を開発し、犯罪に用いている。
なお、禁術は厳密に言えば、永久禁術指定、限定禁術指定の二つがある。
永久禁術指定には、必殺の術、蘇生の術、人体の錬成術、洗脳の術などがあり、公共施設や公道では勿論、例え私有地内であっても、発動すれば必ず近隣の全ての交番と禁術取締局に通報が行くようになっている。
限定禁術指定は、他者に対しての切り裂き術や火炎術、貴金属の過剰な錬成、紙幣に対しての複製術、無許可で他者の肉体に効力を持つ紋章の刺青をする、焚書した禁書に対する復元術など、非常に多様であり、私有地で使用すれば罪に問われない術から、取締局員に逮捕され重い罰則を受けるものまで多岐に渡る。
実は、既に禁術というものに惹かれ始めていた。
卓越した知識や技量、結界で制限された発動までのアプローチの開

発、私有地を持つための財力も必要だ。
常人であれば諦める高いハードルに、かつての禁術師たちは、野心や復讐心、欲望のために挑戦し、そして皆、魔の法の下で裁かれた。
理由は分からないが、本に記された末路を見ても、彼らは強靭な意志を持った、革命家たちのような気がしてならなかった。
この本を読んだその日から、俺は杖が無くても練習できる簡易的な常用魔術を学び始め、台所や母親の部屋からくすねた調理器具や素材で、錬金術や霊薬の作成の真似事をするようになった。
全ては、禁術のために。
ちなみに両親は俺を社交界に連れようと、茶会だとか展覧会だとかに、度々誘ってきた。が、それを無視して部屋に篭り続けたがために、匙を投げた。

◆

日が落ちる頃、女子寮の談話室。
簡素な机には灰皿と木製の煙草入れが、片側にのみ置かれていた。
「マンドラゴラの葉は良い煙草になるな」
革製の外套を着た少女が、唐突に口を開き、目前の素朴な印象の少女に煙を吹きかけないよう、そっぽを向いた。
「あの、リーゼさん、煙草って、お身体に障るのでは…それに、校則違反ですよね」
「リゼ、でいいよベディ」
咥え煙草をしながら櫛で髪を整えている。その様はどこか、彼女の精悍な顔貌もあって、まるで二枚目の役者のような、趣があった。
「私は規則という物に対してあまり強い拘りが無くてね、例えば煙草であれば、常用魔術で匂い消しができるし、灰皿に積もった灰は、少し魔力を籠めた風を吹けばたちまち消える、そもそも煙草は酒と違って酔って暴れることも、床に吐瀉物をぶち撒けることもない、バレる可能性が低く、罰則も大した事のない規則など、いちいち従う必要はないと思うね」

「…リゼは、悪い人、ですか？」
あまりに意を決したような口振りに、リーゼは噴き出した。
しかし、赤面するベアトリックスに気づき、すかさず表情を引き締め、目を合わせ、煙草を灰皿に押し付け、幼子を諭すようにゆっくりと話し始めた。
「難しい質問だな…だが、私は例え出会う全ての人間に悪人と罵られようと、私が行ってきた事やこれから行いたいと願っていることに、後悔や恐れはない」
「その、行いたいことって、なんでしょうか」
「もしかしたら、君や友人を守るために、いずれ苛烈な事をするかもしれない…特に私は、矢面に立つ事に向いていると自負している」
その回答に対し、ベアトリックスは、何か言うことができなかった。
実際その場面を見たからだった。
少しばかり場は沈黙したが、リーゼは気にせず木箱から煙草をもう一本取り出して咥えた。
「…【火】」
指先に小さな火が灯り、煙草に近づけ、大きく吸い、先端は暖かい火の色となって、やがて彼女は煙を吐き出した。

#3

一般魔術教養の教室内は既に、一人の俊英の独壇場であった。
灰色の背広を着た教師は、打てば響くような、優秀な生徒に次第に惹かれ始めていく。
「一般教養魔術で最も使われる魔法体系と術式は？」
「はい、様々な用途で使われるのは念動術、火炎術、水冷術です、そして目覚め薬、体熱薬、鎮炎薬、除草薬などの一般家庭用品の製作には錬金術、音声通信や郵便配送は紋章術または魔導工学です」
次第に問いかける声に熱が帯び、それに応えるように、俊英は、解答に鋭さと正確さが増していった。
それはまるで中央魔法院の討論そのものであった。
「禁術にもそれぞれ区別がある、分かるか？ポンパドール」
「はい、禁術には大まかに永久禁術指定と限定禁術指定があり、更にその中でも他者の肉体や精神を改悪する呪術、直積的に危害を加える邪術、魔薬などを生成する妖術、違法錬成に分かれており、最も有名な禁術である必殺の術は他者の命に直接作用するため邪術として分類され、洗脳の術は他者の精神に作用するため呪術と分類されています、なお、蘇生の術は現段階では精神の完全な復元が観測されていないので邪術として分類されていますが、仮に肉体と精神の完全な復元に成功すれば、究極の呪術として認可され、その直後に永久禁術指定されると考えます」
「補足説明含めて完璧だ、もう上半期の中間考査まで講義に出席しなくていい、どうせ他の科目の教師にも、似た様な事を言われているのだろう？」
「いえ、チャールズ先生が初めてです、…ご配慮痛み入ります」
圧巻であった。
他の生徒はただただポカンとして、リーゼの長台詞を、理解しようにも出来ずに自ずと聞き流してしまい、灰色の背広の教師、チャールズ・ハットルトは余りに完成された流暢な解答に思わず、背広と同じ色をした中折れ帽を外した。

「君の有志または個人研究にはすごく興味がある、ぜひ、新たな叡智を得られる様、精進してくれ、研究事前計画について詰めたかったらいつでも来るといい」
「ありがとうございます、失礼します」
ピシャリと扉が閉まる音がして、数刻の沈黙の後、チャールズは咳払いをして、こう言った。
「アレは規格外だ、皆の者、真似ようなんて思うな、態々太陽を直視する必要など無い、足下の確かな道を往け」

◆

有志・個人研究室と霊薬・錬金術工房が連なる東棟、その影。
本来であれば眼光灯が観える寸前の、その監視が届くか届かないかの場所。
しかし、肝心の通路の眼光灯は眼振を繰り返していて、光を出鱈目に放ったり消したりしている。
壁に寄りかかる一人の少女。
凄惨な有様であった。
上等そうな布で出来た外套と高級そうな生地で出来た襟締は、バラバラに切り刻まれ、美しい、絹の様な金髪が生えた頭も、まるで失敗した植木の剪定のように、しっちゃかめっちゃかに、ざっくらばんに切り刻まれていた。
本来であれば、綺麗で真っ直ぐな鼻は少し右に歪み、シミ一つない肌の四方八方に痣、大理石の様に白い前歯は欠けて、さらに血塗られ、極め付けには、土に這う目前に、真っ二つにへし折られた短杖が転がって、精巧な紋様が彫られた銅の柄は、血が赤黒く滲んで、見る影も無かった。
「ゆるして…お願い…っ…っ……！」
金属の杖が、懇願を拒絶した。
鈍音は止まない。つまり、彼女への拷問は、まだ止まらない。
「罪状は三つ、一つ目は功を焦って私を脅したこと、二つ目は私の読書

時間を妨害したこと…」
二、三束だけに残った前髪を乱暴に引っ張り上げる。
哀れな罪人は、もはや痛みに喘ぐことすら出来ないでいた。
「最後に…これが最も罪が重い……私の友人を脅迫の材料にした事だ」
軋む音を立てていた鉄拳が頬を殴りつけた。
虚な目をしてぐったりとした顔は、涙の跡と血でぐしゃぐしゃになっているが、お構い無しに、拳も、蹴りも、杖も、振るわれる。
断罪者は息切れ一つしていない。
「しかし、こうも短い間隔で退学者が出るのは、学園長を悪戯に不安にしてしまうな、そう思わないか？」
今度は革靴が、倒れ伏す鳩尾を蹴った。
「ひ…い……やだ…」
「聴いているかマリー？…ローズマリー・モーラ」
見れば、革の手袋も金属の杖も赤黒い滲みばかりで、焦茶色の手袋は、白銀の杖は、次第に血に染まっていく。
「別にこのまま君をその惨め姿のまま殴り殺してやっても、それはそれで少し面倒なだけなんだが、私とて、それほど外道でも拷問狂いでもない」
「……な……なん…」
乾いた音と共に、頬が張られた。
今までの鈍い痛みと違う、迸るような、気つけのような鋭い痛みであった。
「頼み事に礼儀は付き物じゃないか？」
「なんでもしますっ！なんでもしますっ！ころさないで！おねがい！ころさないで！」
絶叫と言うよりも、まるで猿叫だった。
法は残酷だ、彼女の喉が焼け切れるような懇願は、薄っぺらな結界一つで路地裏内に掻き消えた。
ピクリともしなかった筈の、痛みまみれの頭部を振り回すように、何度も壊れた玩具のように頭を下げた。

「許してやるよ」
「…え」
「飲め」
革の外套の深い衣嚢から、濁った緑色の液体が入った瓶が取り出され、木栓が血溜まりに落ちて、ブツブツに髪が剥げた頭に、乱暴に水掛けられた。
するとたちまち、時が巻き戻る様に、痣も髪も、無惨な様の上等な生地も、少女が父親から貰った切り刻まれた襟締も、かつてを取り戻していく。
「取り引きの条件その1、この事を誰にも言わないこと」
鈍音。
それは鳩尾を金属の杖が突く音だった。
それは次第に痛みの波が弱くなってはいくものの、何度も、何度も響いた。
「取り引き条件その2、万が一事情聴取された際には、『私が錯乱の呪文の練習を路地裏でこっそりしていたからです』と答える事」
今度は、膝を打つ。
関節部分はは筋肉も脂肪も薄いので、ジンジンとした鈍痛は、しばらく歩く事さえ妨げるだろう。
それは何度も、何度も響いた、
鼻息さえ消す結界の中で。
「取り引き条件その3、今からこの紙に、君の血印で、契約すること」
今度は、衣嚢からクシャクシャになった、一枚の羊皮紙を無理矢理に直しながら、初めて暴力を振るわずに出した。
「早くやれよ」
「…か、かくものは……？」
「は？血印と言ったろ？治してやったんだから早くその歯で何処でもいいから噛み切って血を出せよ」
喉元に杖が突きつけられる。
短杖は、未だ折られたままだ。
抵抗すれば、また、顔以外のどこかを殴られるだろう。

もしくは、もう一度髪をぐしゃぐしゃに切り裂かれるかもしれない。

今頭にあるのは、それに対する恐慌だけであった。

ちなみに言うと、ローズマリー・モーラは、多少の倫理観の欠如や利己的な性格ではあるが、無意味に崖から飛び降りたり、無闇矢鱈に法を犯す様な阿呆ではなかった。

ただ、欲望のために、不安がために、リーゼが個人研究室を借りると、もしかしたら、未だに成果を挙げていない自分の研究が打ち切られたり、予算が減額される事を恐れて、攻を焦り、研究の申請を遅らすように脅迫した。そうしなければ、お前の友人も痛めつけてやる、と出来もしないのに、やる気もないのに、口から出まかせに言った。

それが、変哲もない木の首輪を付けただけの、竜の逆鱗に触れた。

本来であれば、時間をさらに稼いで、眼光灯の異常を察知した教職員の誰かを待つべきであった。

ただそれだけで、激情に駆られた目前の断罪者気取りに、一矢は報いることができた。

しかし、あまりに迅速で、容赦も慈悲もない、魔術の使わない単純な暴力と、魔術を用いて関節的に精神や名誉を傷つける悪意（マリーは、鎌鼬術で、服や髪を切り裂かれたりした）によって、その心は、ただ恐怖と、屈辱と、自らを失望し、後悔するばかりであった。

そうして彼女は、犬歯に親指をしっかりと、突き刺し、くしゃくしゃのそれに押し付けた。

途端に頭痛がした。

さっきまでと比べると、流石に大した事はない痛みであった。

しかし何故か、目の前が揺れている。まるで、さっきの様に、思いっきり殴られた時のように。

「さようなら」

最後にもう一度、その低く嗄れた声が、耳に残って、そして、引き摺り込まれる様に、眠った。

◆

実を言うと、東棟は、唯一地下までである。
日当たりや外気温さえ考慮する必要がある研究生のために、蟻や土竜の巣のように、あっちこっちに研究室が用意されている。
地下に続く螺旋階段は、一番上から見ると、底が暗くて見えないほどで、事故の防止のために、等間隔に網が貼られていた。
結構な時間を歩いた、汚れ一つない服を着た、精悍な顔貌の少女は、あまりに暇だったのか、時々綺麗に手入れされた杖やたまたま衣嚢に入っていた銀貨を手で弄り回し、鏡もないのに櫛で適当に髪を整えながら、咥え煙草をしつつ、黙々と階段を降りて、ようやく、目当ての部屋まで辿り着いた。
面倒臭くなったのか、後ろ手に煙草を投げ捨てると、舞い上がった砂の様に、吸い殻はたちまちに消えた。
そして扉を開けながら、気怠そうに、向かい合うこともなく、そこらの椅子に座りながら本題に入った。
「ルーシー、新規顧客だ、中が一人、女、3年生の癖に結構な馬鹿だったから、重めの契約をさせといた、外は二人、どちらも男、半亜人(バスタード)のゴロツキと、缶詰工場で働いている純血の小鬼(ゴブリン)、片方は商売取り引き、もう片方は普通の取り引き」
個人研究室の中央で、床に何かの紋章を書いていた、ルーシーと呼ばれた猫背の女が、これもまた気怠そうに振り返った。
まずはその不気味な容姿、古くなった糸のような、艶のない伸びっぱなしの黒い髪。一応前髪は額の所で真っ直ぐ横に切られているが、どうもお洒落じゃない。
げっそりと頬骨が出ていて、目には覇気がなく、その下には濃い隈があった。
顔貌は、他の大多数の生徒と比べると、目が細く、顔に凹凸がなく、所謂東洋人といった所。主に大東亜華国や、日出国(ヒズル国)に住んでいるその顔立ちは、ここでは珍しい。
こまめに洗濯していないであろう黄ばんだ白衣は、その整えられて無さそうな髪も相まって、かなり不潔に見える。

よく見ると、彼女は裸足だった。厳密に言えば、埃を被った革靴の踵を素足で踏んでいた。
恐らくリーゼとはそう大差無い歳の筈だが、気色の悪いほど、老けて見える。
ルーシー・リー。
数少ない、個人研究室持ちの、４年生である。
「賭けしようや」
見た目通りの低い声で、リーゼよりも、もう少し嗄れていた。
喋り方は西オウェルの訛りが強く、母音が強くて抑揚が独特という特徴があった。
「条件は？」
「商売取り引きの相手を当てれたら、その銀貨と煙草一本くれん？」
「…まぁ、別に良いんだが」
うーん、と顎に手を当てて、首を捻る仕草自体は、年相応の少女であったが、口を開く度に見える歯は、やはり白衣のように黄ばんでいて、滑舌もそれほど滑らかではなく、まるで痴呆の老婆だった。
「純血小鬼やろ、アイツら、がめついの多いし」
「…いや、違うが」
「はぁ？……おもんな」
勝手に賭けを持ちかけておいて、勝手に機嫌を損ねる。
あんまりな態度であったが、不思議とリーゼは、そこまで腹立たしい思いをしなかった。

＃4

その個人研究室の机には、雑多に代物が投げ出されている。
硝子の試験官、計測器が付いた坩堝、火炎術の紋章が描かれた手巾、青銅の瓶、擦り切れた本と手記、防護眼鏡、小瓶に分けられた様々な粉末、消息子、精製水、血が入った注射器、唾液と痰が混じり入ったそこそこに大きい瓶、厚い手袋、異国の言葉で書かれた札、何かの肝や脳味噌が保管されている瓶、大小色々な針、お灸、懐中時計。
隣には寝台があって、革の外套と襟締を脱いで口から護謨性の管を咥えたリーゼが、今朝の新聞を読みながら横たわっている。
「３０分経過」
ルーシーが、注射器の外筒を口からはみ出る管に接続して引っ張ると、濁った灰色の液体が、ポツポツと吸い取られていた。
ある程度吸い出すと、管…つまり消息子が、小鬼の子供程の長さだけ、口からぬるりと吐き出された。
注射器に入った液体を試験管に移すと、紋章が描かれた手巾は、青い炎を円形に発露し、丁度が炎が当たらない位置で、試験管は固定された。
泡と共に、次第に澄んだ黄色になっていく体液は、尿の様で、見た人を不快にさせるかもしれない。
「……どうだ？」
問いかけは無視され、沸騰した体液に、様々な粉末を、防護眼鏡をしながら、大袈裟なくらいに慎重に注ぐ様を見て、新聞に視線を戻した。
その間にも、血液や唾液と痰が混じった体液を試験管に移したり、炙ったり、色々している。
おおよそ、長針が半周する頃、ルーシーは血走った目で、試験管を振って、坩堝に移した。
「血中の魔素濃度に対して、おおよそ黒胆汁が八割、黄胆汁が二割、キショ、見たことないわこんなん」
言葉とは裏腹にその顔は喜色満面で、結局譲ってもらった煙草を咥

えながら、蚯蚓が這い回った様な汚い字で、手記が埋められていく。
「相変わらず人間辞めとるな、ホンマに純人か？」
「家系図なら実家にあるぞ」
「やかましいわ」
　軽口を叩き合いながらも、木筆が止まらない。
　やがて手の側面が鉛の染料で真っ黒になった頃、咳払い一つし、詩でも詠うように、高らかに経過が書かれた手記を読み上げる。
「黒胆汁は状態が安定、変質や結晶化の兆候無し、血液も少なくとも5年生の平均魔素濃度を超えとる、どっちも通常の沸点でも融点でも安定しとるね、意味分からんわ、黄胆汁はやや薄い、錬金術程度なら影響は無さそうやけど、錬丹術なら他に適性のある奴のを掻っ攫ってくるしかないかも、紋章や錬金陣や霊薬の媒体としては安定して変質は出来る、粘液は…霊薬との反応を確認したけど、この前と比べても結晶化までの時間が早くなってる、ところでリゼ、今、食欲あるん？」
「最近はあったり無かったり」
「肉体の適応が追いついてへんな、軽い過剰黒胆汁症やな、暫くは鉄分の多いホウレンソウとか食っとけ」
「ご忠告どうも」
「あとお前、唾液取る前に煙草吸うなや、染み出しとんねん魔力性塩基が、態々置換すんの面倒いんじゃ」
「それについては申し訳ない」
　全く情念が篭っていなかった。
「お前がクソ凡人やったら今頃解体（バラ）しとるで」
　ぼやきながらも試験管に入った様々な体液を実験し、ある程度の記録を書き残せたのか、今度は唐突に机には突っ伏して、ひんやりとした机に頬頬骨を当てながら、大きな溜息を漏らした。
「はぁ～…これで今日の実験の半分かいな」
「まだ刺青紋章がある」
「知っとるわボケカスコラ」
　数秒、欠伸をしながら目をパチパチとした後、勢いよくそのまま立ち上がり、リーゼの襯衣の釦を外した。

顕になった若々しい肌には、肩、薄い乳房、鳩尾、下腹部、太腿にかけて様々な刺青があり、時々それらは、脈動する様にモゾモゾと蠢いていたり、妖しく光ったりしていた。
「月経は？」
「ない」
「目眩、偏頭痛、便秘もしくは下痢の症状は？」
「ない」
「きっしょ、それでも女か？」
おざなりに言いながら、何処から手に入れたのだろうか？処女の経血とすり潰した黒猫の肝で作られた塗料を染み込ませた針を、それぞれの刺青に軽く刺していく。
刺青によって反応は違う、色が濃くなったり、光を発さなくなったり、ピタリと動きを止めたりと様々だ。
「無月経の刺青は魔力の流動が安定しとる、拒否反応も無い、身体強化も任意痛覚遮断も免疫向上も自然治癒促進もやな、もう身体に定着しとるから子宮も収縮するし、おっぱいとかケツおっきならんで」
「…利点あるのか？」
「寿命と分娩捨てた奴は言うことちゃうな」
そして、これもまた手記に汚い字で経過を書き写すと、今度は寝台に飛び乗って、そのまま枕を抱いて、目を閉じてしまった。
「頭使ってしんどい、寝る」
「おやすみ、商談はまた今度、煙草はここに置いておく」
「おおきに」
ぶっきらぼうにそう言って、すぐに鼻提灯を膨らませて、さっさと眠ってしまった。
最後に振り返ってみたが、相変わらず、鉄臭くて、小便臭くて、ツンと鼻にくる刺激臭が蔓延していて、その中央で呑気に眠る神経にドン引きしながら、扉を閉めた。

◆

夜更け、談話室には、まだ灯が点いていた。ベアトリックスが、鍵を借りたからだ。
いつもの定位置、窓際の二人用の机と椅子に、今度は片側に帳面と参考書が広がっていて、対面には相変わらず灰皿と煙草入れの木箱だけだった。
「今日の課題は？」
「四体液について、それぞれの特徴を纏めなさいって」
やる気満々と言う風に、硬筆を握って、そう言った。
「…チャールズ先生、だいぶ授業の進行を巻きでやってるな」
「やっぱり？」
ふふっ、と可笑しそうに微笑む姿は、青春のまさしく1頁のようで、リーゼは自分が一介の学生の様になった気になった。
このままおしゃべりでもしそうな雰囲気であったが、すぐに気を取り直し、真剣な目で今日板書したばかりの帳面を音読する。
「…えーっと、四体液は血、黄胆汁、唾液などの粘液、黒胆汁の事」
「正解」
えへへ、と笑いながら、さっきよりも少し声が出て、自信満々に読み上げていく。
「そして四体液の比率は遺伝や食生活などによって個人差があって、最も多く体に流れている体質をそれぞれ多血質と黄胆汁質と粘液質と黒胆汁質に分かれている、魔術師はそのどれかに必ず分類される、そして、四体液にはそれぞれ使い道に得意分野があるんだよね？」
参考書と目の前の専属教師の顔を交互に見ながら、帳面に硬筆を走らせていく。カリカリと音がする度に、先端の灰が、徐々に唇に近づいていく。
「黄胆汁質だけは覚えてるの…確か、詠唱術！」
「いや、それは多血質だよ、黄胆汁質は錬金術だ」
「えっ」
「……ほら、ここ」
指差した所には、「詠唱術は主に血液中の魔素を消費することが多いので、多血質の人間は、詠唱術においては才覚を見せることが多い」

と、たしかに書かれていた。
「あっ」
今度は参考書に目が釘付けになって、カチカチと秒針が刻まれる音だけになって、合点がいくと共に赤面した。友だちにいい格好を見せたかったのに、早速トチってしまったからだ。
15歳、既に肉体は大人へと変わっていく年齢にも関わらず、ベアトリックスは、未だ無邪気であった。
「ちなみに粘液は霊薬の媒体になり易い、特に唾液は大概の動物や魔獣の肝や血と融和しやすい、他にも経血や精液は、魔力性の液剤があれば金属粉末とも反応するから錬金術にも流用し易い、定期的に新鮮な体液を保存しておけば、自主実験の際に時間を取らなくて済むぞ、だが痰は主に呪術や妖術に使われるし、錬金術に応用しづらいから、あんまり詳しく調べることも保存しておく必要もない」
「く、詳しいねリゼ…」
「…？一応この参考書ならざっと目を通してるしな」
「…そういうことじゃ、ないんですけど」
当たり前だが、年若い乙女にとって、経血だの精液だのを、学術的な観点とはいえ人前であれこれ語るのは憚られる。
しかし、そういった常識の外に居るから、教師に講義を免除される程の優秀さが得れるのがしれないと、ベアトリックスは思い直した。良い子である。
「…じゃ！じゃあ、黒胆汁質については？」
あからさまに話題を変えた事には気がつくが、生憎リーゼは、何故態々そんなことをしたのか、合点がいかないでいたが、いちいちそこに首を捻って、さっきの話題を掘り返すのも無粋かと思って、雑な軌道修正に乗る事にした。
「黒胆汁は万能の体液だ、黒胆汁質は天才か狂人の体質とも言われている」
「…ええ？」
「ほぼ全ての魔術に使用できるし錬金術や霊薬の素材にもなる、詠唱術をやり過ぎた奴は大体が貧血状態になるが、それでも無理に唱えれ

ば、大概黒胆汁が消費される」
「すごっ」
「だが、黒胆汁は四体液の中で最も魔素が含まれている代わりに、違法霊薬や先天性疾患とかで過剰に分泌されれば、重い精神疾患や魔術の過剰出力になり易いし、逆に欠乏すれば食物を消化出来なくなる、万が一その状態が何日か続いたら体内で黒胆石に変質して、身体から過剰な毒素や魔素を排出できずにそのまま死ぬぞ」
「死ぬの!?」
「実際、戦時中は欠乏症が原因で死ぬ奴も多かったらしい」
いきなり人の生き死にの話になったので、思わず硬筆が止まった。
ふと、少しだけ、不安が過ぎった。
「…リゼってさ、どれなの？」
「黒胆汁質だけど」
「……大丈夫なの？」
「別に、当たり前だけど、黒胆汁以外の体液だって勿論あるし、そもそも魔素欠乏症になったら、術を唱えるどころか普通は立っていられないらしい」
「…よかった」
胸を撫で下ろして、一息付いた後、ベアトリックスは、唐突に硬筆をポイと投げた。
ちょっと面食らった顔を知らんぷりして、いそいそと帳面も参考書も鞄に放り込んでいく。
「今日は疲れたからここまで！紅茶飲んで寝ようよ」
「…そうだな」
そうして、割と早くに勉強会はお開きになった。
結局、最後まで彼女は、黒胆汁の話になった時から、明らかに煙草を吸う頻度が上がった事に気づかないままだった。

#5

もう少し昔の話を掘り下げるとするならば、もう少し詳しく話すのであれば、こういった内容になる。

6歳の頃から部屋に篭って社交を無視し続けていたので、俺はとうとう通信制の教育機関に、偶然見つけた家の執務室にあった入学書類を勝手にぶち込んで、郵便受けに届く課題をひたすらやり遂げることにした。

ちなみに入学金は父親の財布から取り出した自動支払い用紋章券を拝借して、バレないように深夜に家を出て、馬鹿でかい家の敷地内をネズミのよう忍び歩き、町まで出て、近くの紋章照合機能付き自動預払機が置いてある小売店に行って、そこで振込をした。

入学書類の保護者同意書の筆跡も、家で見つけた父親の手紙を参考に真似て書いた。

身体は6歳の少女、町中で人攫いなどに拉致される危険は勿論あったし、入学の為の面接は必要無い、とは事前に書類を見て確認していたものの、もし追加で要求されればかなり面倒な事になるという可能性もあった。

が、何とか賭けには勝ったようで、人攫いに遭遇することも面談の要請もなく、郵便受けから出てきた合格通知を見て、ほっと一息をついた。

こうして、俺は家から出ることなく幼年学校の教育を受けることができた。

家族との会話を殆ど断絶していたので、今までこの世界の常識やこの国の社会制度を知る機会がほとんど無かった。夕食の際は家の倉庫にあった豆やとうもろこしの缶詰を勝手に自室に持ち込んで、本から独学で学んだ火炎術で、湯煎して食べた。

両親は俺を幼年学校に連れて行こうとしたが、あの頃は毎日、前世の記憶を断片的に思い出す事が多かったので、余計な環境に身を置くことよりも、とにかくこの世界の情報を集めることに必死だった。

届いた課題は、最初は四則計算や基本的な文法、文字の書き方のよ

うな舐めた内容だったので、全部に完璧な解答を書いて、用紙の余白に出来る限り自分の論理的思考能力を証明する文章、つまり図形の積の求め方などを書いたものや語学への理解を示すために今まで読んだ本の読書感想文、本から得たこの国の歴史について簡単にまとめた記述を書いて、その日の内に送り返すと、今度は分厚い様々な参考書と共に、何の分野を学びたいか記入する調査書が内封されていた。

最も興味があったのは、魔術に関する法律、略して『魔法』だった。

どのように魔術を行使するのかは、本から得た知識で学ぶことができたが、どうやって魔術を管理するのか、管理する機関はどのようなものか、どうやって禁術と呼ばれる違法な魔術や霊薬を取り締まるのか、そもそも魔術は全部でどれくらいの体系に分かれているのか、それは前世では絶対に得ることが無かった知識であり、この国の先人が積み上げた歴史であり、知恵であった。

次に興味があったのは、この国の民法であった。

国があれば、法は必ず存在するからである。

この国に身分制度はあるのか、宗教はあるのか、国民一人一人に納税の義務はあるのか、教育を受ける、または教育を受けさせる義務が保護者には発生するのか、労働の義務はあるのか、この国の社会は資本主義なのか共産主義なのか、どのような通貨があるのか、そしてそれはどんな紙幣でどんな貨幣なのか、物価の相場はどれほどなのか、紋章券以外の支払い方法はあるのか、行政は、立法は、裁判は、教育機関は、権利は……思いついた疑問が頭の中で溢れ出しそうだったので、帳面に気が遠くなるほど箇条書きして、上記二つにおよぶ質問が書かれた紙を、調査書と共に送付した。

その間にも、読んだ本に書かれた魔術はどの分野も片っ端から実験して、紙にまとめて、足りない用具や文房具があれば、家族が寝静まった深夜に、あらゆる部屋を訪れて探し当てて自室に持ち込んだ。

何度も読み直して内容を完全に覚えた本は、実験記録用の帳面を保管する場所の為に、暖炉に突っ込んで燃やした。

前世の記憶は、忘れないように思い出したらすぐに、前世の文字で書き起こして、万が一見つからないように鍵付きの引き出しに仕舞い

込んでは取り出してを繰り返した。
　こうして、質問に対する答えを確認して、様々な課題をこなして、自主的に実験もして、棚の一列が自分で書いた記録簿で埋まったある日、俺は股ぐらから血を出した。
　初潮である。
　１２歳の時だった。
　痛みと不快感で、頭が一杯になり、既に前世の自分は男であったという記憶も思い出していたので、かつての肉体との乖離を一層強く実感して、これから毎月こんな生理作用に苛まれるという事実が頭をよぎって、そうして、発狂しそうになった。
　いや、もしかしたら、発狂した。
　その時、俺はとてつもない程の、鳥肌が立ち、怒髪天が立ち、手がたちまちに震えるほどの、６歳の頃に、最初に前世を思い出した時とは比べ物にならないほどの強い憤怒と憎悪が、異世界という外界と、自分の肉体という内界に溢れた。
　余りにも、余りにも強い感情の発露は、自室の机と、壁と、本棚にぶつけられ、手が切れて血が出るまで、あっちこっちを殴りまくって、金切り声を発しながら、とにかく暴れた。
　散々に暴れた後、扉が叩かれる音を無視しながら、俺はそこいらにあった、くしゃくしゃになった帳面に、とにかく今の心の内で荒れ狂う激情の正体を探る為、がむしゃらに、今の感情は何に対してなのか、何に強い憤りの原因を抱いているのか、書いては消して、書いては消してを繰り返した。
　こうして、日が沈む頃まで、暴れながら，椅子を窓に投げつけたりしては書き殴って、寝台を蹴りまくったりしては書き殴って、ようやく、俺は二度目の生で、『何に怒りを抱いているか、何をしたいのか、どう生きるか』について、明確な回答を書く事にした。
　怒りの原因その１、月経。
　俺は男だった。間違いはない。陰茎があって、筋肉があって、喉仏が突き出て、無精髭が生えて、髪は短く切って、公の場以外では男らしい粗野で品の無い言葉遣いで、ズボンを履いて、格闘技の名試合に

は興奮して、気に食わない奴とは喧嘩したこともあって、スポーツや車に関心があって、いずれ仕事に就いて、金を稼いで、妻となる女性と子どもを養うのだろうと思っていた。
自分は男であって、アイデンティティであって、特にそれを誇りに思うことは無かったが、それが当たり前であった。
それがどうだ、今の俺は、股から血が流れ、艶のある髪はすぐに伸び、肌はツルツルとして、手足は小さく細く、少し走れば息切れして、声は鈴のように高音だ。
肉体と精神が乖離している。子を産む事ができる女の身体に男の性自認がある。望んで女になったわけでは無いにも関わらず。
女が憎いわけでも無い。そういう時期もあったが、すぐに女全てを一括りにしてとやかく言う事の愚かさと馬鹿らしさを成長と共に知ったからだ。
男が憎いわけでも無い。男は全員がどこか馬鹿だとは思っているが、時にそれは驚異的な力を発揮する事を知っていたからだ。
ただ、もしこの荒れ狂う精神を育むために、あるいは異性の肉体に俺という中身を入れる事でどこか歪んだ人間が生まれることを期待して、こんな事を仕組んだ奴が、もしこの異世界の何処かに居るとすれば、俺はソイツをぶっ殺すだろう。
月経は、俺が女になったという事実を突きつける、ある意味では究極の性自認の否定であった。
怒りの原因その2、国。
この国は歪んでいる。人間は醜悪で傲慢で欺瞞に満ちた存在だ。
亜人と呼ばれる少し外見に特徴があるだけの同じ知的で社会性のある存在を差別し、区別し、階級を作って、蹴落とした。
表向きは民主化を謳い、全員が平等であると掲げながら、第一次産業や屠殺や廃品回収や売春に、亜人たちを押し込めた。自由を謳っていながら、その実、亜人たちに自由は確かに無かった。
魔法を敷き、禁術を封印したのは、魔法教育機関が亜人たちを入学させないのは、亜人たちに自分が万全に整えた安楽椅子を穢されないように作り上げた、どこまでも醜い自己保身の悪政であると、そう

思った。
別に亜人が可哀想だとかは微塵も思ってもいない。寧ろ、どうにかして武力蜂起を計画するなり、あるいは真っ当に抗議運動するなりしないその負け犬根性にも腹が立ったからだ。
現に、今この国に住む亜人と半亜人たちの殆どは、貧民窟、つまりスラムに住んでいて、違法霊薬や魔薬の売買、売春買春、強盗、強姦、殺人、違法錬成による人身売買や詐欺が横行している。
腐っている。
人間は偉い、豊かで幸福に暮らす権利がある。
亜人は醜い、卑しい存在なので虐めてもいい。
その傲慢さに吐き気がした。
そうして人間は亜人を差別すると、亜人は人間を憎み、人間の中で最も非力で無力で純粋な子どもを狙って、社会から受けた屈辱に対する報復のように、殺したり、痛ぶったり、犯したり、魔薬漬けにしたり、尊厳を破壊した。
憎悪が連鎖し、報復が報復を呼び、止まらない悪意は、理不尽は、いつも純粋で善良な誰かに飛んで来て、そしてまた、怒りが燃える。
とんでもなく阿呆で、愚かで、無知で、傲慢で、残酷で、残虐で、冷酷で、その癖に街中を歩く人間はさも「私は善良でございます」と言う風に、太陽の下を歩いている。こうしている間にも理不尽に血を流し、泣き喚き、世界を呪っている誰かが居るというのに、何もせず、ただ毎日を浪費するだけ。
虐げられ、誇りを穢され、尊厳を無視され、文化を燃やされ、仕組まれた生涯のレールに乗らされ、社会に飼い慣らされ、人間に媚びを売ってお零れを啜り、人間は愚か同じ民族すら見下し、自分は世を渡る賢者と勘違いしている詐欺師同然のクズと、ごく単純で短絡的で杜撰で衝動的で突発的な暴力を、虐げてきた本人でも社会制度ですらない、女子どもなどのか弱い存在にぶつける事で、如何にも自分は高尚な復讐をしているのだと勘違いしている白痴。
人間も亜人も、もはや繰り返された憎悪の応酬で、すっかり何方も救えない存在になったのだ、と思った。

そうして…

『何をしたいのか』と『どう生きるか』が決まった。

◆

黒胆汁質は、かつて憂鬱質と呼ばれ、魔素を多く含む為に天才の体質と言われると同時に精神錯乱、狂人の体質とも言われた。

１７２１年に四体液説を提唱したユナニ・ピポテラスは、黒胆汁質は、『矛盾、二重思考の体質』であるという仮説を立てた。

その仮説は、長い時を経て、正しかったと証明される。

リーゼ・ポンパドール＝ダックテイルは、圧倒的な矛盾を、二重思考を抱えている。

怒りの根源に優しさと公平さがある。しかしそれを主張する為の手段は恐ろしく暴力的で苛烈である。

憎悪した筈の、自分で自分を正当化し、残酷になるという、人間の性質。

それと全く同じ筋道で、矛盾に気づかないまま、気に食わない人間を暴力で排除しようとする様は、まさしく、精神錯乱と言えた。

#6

ルーシー・リー。４年生。

かつては大東亜華国に住む李若溪（リ・ルオシー）という名前であった。

華国拳法の師範代である母と、錬丹術師であり、刺青師でもあった父を持ち、幼少期から拳法や勉学に励む、物静かな少女であった。

しかし、公暦１９８１年に発生した人民革命という武力革命によって、故郷は混乱し壊滅、命の危機を察した両親と共にオウェル王国に亡命する事を余儀なくされた。

亡命して最初の１年は、オウェル王国の西部、カサオ市で過ごして、難民申請をしてオウェル王国の名前を得たり、同じくらいの年頃の難民と共に語学学校に通った。

語学学校ではそこそこの人気者で、拳法の演武を見せたり、木の板を蹴り折ったりしては、様々な肌の色をした同窓生たちからの賞賛を浴びた。

真面目で冗句すらあまり言わない堅物ではあったが、陽気な人柄もあって、友人に囲まれた１年間を楽しく過ごし、それぞれの進路へ旅立った。

この頃から既に錬丹術と紋章術の才能があった若溪は、アバー＝ガーヴェニー高等魔法学院に編入し、立派な錬丹術師として成功する未来を夢見ていた。

しかし、物珍しい東洋人という容姿と西オウェルの独特な訛り、編入生にも関わらず優秀な成績で講義を免除されるという話題性によって、同級生から酷いいじめを受けた。物を隠される、参考書を破られる、便所で殴られる、陰口や無視、時には恐喝されてなけなしの金を強奪された。

一度だけ、たったの一度だけ教師に相談しようとしたが、両親が自分のために学費を稼ごうと、亜人や半亜人に混じってまで懸命に製紙工場や少しばかり遠方の大規模農園で一日中働いていると知っていたので、大事にして心配をかけたく無いと思ってしまった。

若溪は、いじめに耐えて立派に卒業すれば、両親と共に幸せな生活

を送ることが出来ると盲信し、耐えてきた。誰の前でも教師の前でも毅然とした態度で、決して弱音を吐かなかった。殴られても、母から習った拳法で報復したりせず、真っ直ぐに飛ぶ矢のような、年若い少女とは思えぬ剛毅な眼差しで、無言で抗議した。

周りに囃し立てられて殴る事を余儀なくされた、心弱き夕暮れた学生たちは、無抵抗の女生徒に気圧された。

ある冬、長期休みなので、寮を出て若溪は両親の元に帰省した。

難民用の公営住宅は、比較的治安の悪い町に用意されていたので、出来るだけ表通りを早足で歩いた。

老朽化したあばら家は、一見いつも通りだと思って、扉を開けると、玄関に違和感があった。

靴が散乱している。しかも、土や砂で汚れている。

母は武術の師範代だ。構えていた道場も、中々に立派だった。

礼儀に厳しく、礼節を弁え、家事に手を抜く人では無かった。

よく見れば、廊下に、ぽつぽつと髪の毛が落ちている。

嫌な予感は徐々に増し、居間に続く扉がいつもよりも重く感じたが、案外母も働き詰めで疲れていて、今日が偶然そういう日だったのだ、と邪推を辞めて、開けた。

居間には、虚な目をした母が、涎を垂らしながら、腕に空の注射器を、何度も何度も、殴りつけるように刺していた。

床は赤黒い血で汚れていて、まるで屠殺場そのものだった。

余りにも凄惨な光景に硬直していると、ようやく、視界の端に映る父の姿を捉えた。

父は丹薬を食っていた。棒立ちのままで、こちらも虚な目で、落ち着きなく歯軋りをしながら、唇を噛み切って血が出ていても、只管に、丹薬を噛み砕いていた。

二人とも、ザラザラとした、銀粉のような粉末が、流れっぱなしの鼻水にくっついていた。

魔薬。

刹那の快楽の代償は、感性と自尊心と人間性を喪う事。

知らぬ間に、両親は、人で無くなっていた。

快楽を貪るだけの獣になっていた。
昨日か、一昨日か、もしかしたら、編入した次の日からか、永遠に分からないが、一つだけ分かることがあるとするならば、もう両親が両親では無くなってしまった、不変の事実だけだった。
不思議と、涙は出なかった。
怒りすら沸かなかった。
ただ、自分の世界は終わった、と思い、何も感じなかった。
言うとすれば、精神の死。彼女の中にあった過去の幸福と未来への希望は、瞬く間に泡となって消えた。
踵を返して、町を歩いた。治安の悪い町を、のろのろ歩いた。
酷く寒い気がしたが、身体は震えなかった。
ふと、路地裏の遠くの方から、鈍い音が聞こえた。打撃音だ。
幼い頃、故郷でよく聞いた。微かだが、たしかに闘争の音だ。
音を頼りに近づいて、曲がり角から真っ暗な陰を覗き込むと、一人の少女が、寝転がる乞食の老人を、金属製の杖で滅多打ちにしていた。
悍ましい様であったが、何故か興奮した。組手前の武者震いに近い、高揚感があった。
なんとなく、ふらっと近づいてその老人を見ると、皺やシミだらけで気色が悪かったので、雑に、適当に、脚で物を退かすように、顔を蹴り飛ばしてみた。
唾と歯と血が路地裏の壁に飛び散ったのを見て、汚い、と思った。
横目に映る杖を持った少女は、気まずそうに、怪訝な顔をしたまま黙っていた。
「何してはんの？」
話しかけてみたら、意外と素直に応えた。
「気持ち悪い顔で魔薬やってたから、私刑してる」
徐に煙草を咥えたその少女は、顔立ちは未だ幼かったが、その割に中々鋭くて冷酷な目を、油断なくボロ雑巾みたいな老人から外さない様子から、かつての師範代であり母であったモノ（ヒト）が、いつも組手の時に放っていた剣呑な威圧感を感じて、なんだか、興味が湧いた。
「ほぉん」

「因みにこいつ、ショボいけど売人」
「はええ、コイツ、まるで人みたいな汚物やな」
「しかも半亜人」
「あらぁ、激しく目障り」
「激しく同意だ」
　よくよく目の前の少女を観察していると、微かに聞こえる呻き声が五月蝿かったので、足元の汚物をもう一度蹴り飛ばして、ぐったりとした様を見て、「これは殺しになるのか、ならないのか」と思案したが、別に態々考えることでも無いと思い、改まって目の前の少女に向き直ってみた。何故かは未だに分からないが、気が合いそうな予感がして、友だちになりたいと思った。
「名前は？」
「……うーん…リゼ、でいい」
　何やら言い淀んでいたが、別にどうでもよかった。
「ウチは李…やなくて、ルーシー・リー…よろしゅう」
　なんとなくだが、李若溪という名前を捨てたくなったので、難民申請の時に得た名前をこれからは使おう、と思った。
「所でルーシー、禁術とか好きか？」
　まだ、友だちになったと確信できる状況では無いにも関わらず、いきなりこんな妄言を吐いたリゼへの返答は、
「魔薬と同じくらい好きやねぇ」
　即興の、お粗末で不謹慎な冗句だった。

◆

　腐った国を変える為に、まず、武力革命による政権の奪取を思いついた。
　なので、自分が政党の党首になった時のために、色々と考えてみた。
思想形態（イデオロギー）は少数独裁制集産主義。
公約（マニフェスト）は『オウェル国民の価値を回復』と銘打って、半亜人を含む全亜人の民族浄化（ジェノサイド）を最終目標とした。

そして、最終目標のために、３つの目標を設定し、具体的にどう行動するべきかについて、検討し、帳面に書いた。
第１目標。テロ組織の創設。
詳細、未定。
第２目標。組織の拡大と既存国営機関への入局。
組織拡大は未定、国営機関への入局は、王国有数の高等魔法学院とかの首席になれば達成できると考えていたので、ギリギリ未定ではない。
第３目標。武力革命。
勿論、詳細は未定。
正直、後で見たら笑ってしまうくらいに、荒唐無稽で穴だらけの壮大な目標だったが、まるで自分が何にでも成れると信じていた頃の、少年の日の心になれた気がしたので、なんだか懐かしくなって、しばらく何も詳細を書き込まず、そのままにしておくことにした。
１４歳の頃、俺は当たり前のように外出を繰り返していた。側から見たら家出少女同然だろう。
勿論家の連中は何も言わない。最近は見かけもしない。
煙草の味が着いた不味い唾を、いつも通りクソデカい敷地に吐き捨てながら町まで歩いて、ブラリと路地裏を彷徨いていると、汚いモノを見つけたので、掃除して地域貢献してやっていたら、一人の東洋人と出会った。
死んだ目をした子どもだった。
髪は手入れされて艶があって、育ちが良さそうな娘だと思った。
上等そうな素材ではなかったが、紅い簪をしていて、物珍しいなぁ、と思った。それだけの印象だった。
が、その直後、雑に汚物を蹴り飛ばす様を見て、なんだか友だちになりたくなった。
路地裏の道は歩き慣れていたので、するりと表通りまでご案内すると、新しくできた本屋を見つけたので、一緒に寄った。
適当に本を吟味していると、華語の本を見つけた。
隣の東洋人なら読めるだろうと踏んで、見せてみた。

「これ、読めるか？」
「舐めんなや、母国語やぞ」
別に揶揄うつもりで言ったわけではなかったのに、大袈裟に臍を曲げながら、吐き捨てる様に反論された。
しかし、全く不愉快で無く、心地良さすらあった。
「来年には高等魔法学院なんだ、出来るだけ入学前に色んな勉強をしておきたいんだよ」
「えっ、年下？」
そこに食いつくのか。
「…何歳だと思ってたんだよ」
「いや、まぁまぁタッパあるし、テカテカのヘンな髪型しとるし、肩幅もお嬢ちゃんにしちゃゴリゴリやし、なんや、てっきりタメかお姉さんやと…」
さっきまでの大袈裟に不貞腐れた顔は何処、途端にはしゃぎ出したので、悪戯心が沸いて、びっくりさせてやろうと思って、少しだけ自分の秘密を話してみようと、
「大体…2年前くらいに無月経の刺青紋章を入れたからな、身体が男子らしくなってきているんだよ」
敢えて何でもない様に言ってみた。
「…マジ？」
たぶん、普通にドン引きされた。
「…悪い事言わん、ウチが健診したる」
まさかの、お節介まで焼かれた。
「何処で？」
「…半月待て、気合いで個人研究室ぶん取る」
遂には、今までのちゃらんぽらんな態度とは打って変わって、初めて真剣な様子を見せた。
勿論、気になった。
だって、大抵の子どもは、家があるから。
「お前の家とかでいいんじゃないか？」
「家、無い」

おお、百面相だ。
最初の死んだ目が、久しぶりに帰ってきた。
うん、流石に自分が少し踏み込み過ぎた事を悟った。
無礼を詫びるのは、大切なことだ。
「煙草吸うか？」
「美味いん？それ」
「美味いよ」
なので、これで手打ちにして貰った。

＃7

上半期の中間考査の科目は以下である。

●1年生必須科目

・一般教養魔術

・魔法学

・歴史

・総合薬学

・数学

●1年生選択科目

※全2科目の選択

・占術

・結界術

・詠唱術

・錬金術

・紋章術

・魔獣環境学

・霊薬学

・魔導工学

続いて、中間考査成績の順位。

首席

リーゼ・ポンパドール＝ダックテイル

一般教養魔術…首位、１００点

魔法学…首位、１００点

歴史…首位、１２０点（来期分加点）

総合薬学…首位、１２０点（来期分加点）

数学…首位、１００点

錬金術…首位、１１０点（来期分加点）

霊薬学…首位、１２０点（来期分加点）

考査合計点…７７０点

《所見》

非常に優秀な成績を収め、授業態度は意欲的です。
考査内の小論文は、非常に論理的かつ革新的な意見が多く、それぞれの担当教師の判断で満点を超えた科目が多かったです。なお、満点を超えた分の点数は来期分の考査に加点されます。
これからも引き続き優秀な成績を残せるよう、願っています。

次席
アールヴ・ナロー
一般教養魔術…第２位、９９点
魔法学…第３位、９８点
歴史…第２位、９７点
総合薬学…第２位、１００点
数学…第２位、９８点
錬金術…第２位、１００点
結界術…首位、１００点
考査合計点…６９２点
《所見》
非常に優秀な成績で、ポンパドール嬢が居なければ首位を取れていた程の秀才です。
結界術に秀でているので、本人の希望通り、進路は中央魔法院を見据えた指導する方針です。

３位
トーマス・ジョン・デトワイア
一般教養魔術…第３位、９８点
魔法学…第２位、９９点
歴史…第３位、９６点
総合薬学…第３位、９９点
数学…第３位、９６点
紋章術…首位、９９点
魔導工学…首位、９９点
考査合計点…６８６点
《所見》

紋章術と魔導工学では首位、必須科目も高得点ですが、最終問題で減点される傾向が多く、集中力の欠如がやや散見されます。
今後の課題は問題文の見直しと思われます。
素行は良好で友人も多く、有志研究の目処も立てているので、今後に期待が寄せられます。

４位
ベアトリックス・セネル
一般教養魔術…第５位、９６点
魔法学…第４位、９５点
歴史…第４位、９５点
総合薬学…第４位、９７点
数学…第４位、９５点
錬金術…第３位、９８点
霊薬学…第２位、９９点
考査合計点…６７５点

《所見》
入学当初は上位１０名にも入らない程の成績でしたが、放課後もポンパドール嬢と自主学習を欠かさず行っていたようで、驚異的な成績の向上が見られました。
素行も良好で同級生との交友も多く、教員の手助けも率先しています。
運動能力がやや低いので、今後の課題は身体能力の向上と思われます。

５位
ハンプティ・ダンプティ８世
決闘士倶楽部所属（特別推薦枠）。
一般教養魔術…４位、９７点
魔法学…５２位、６１点
歴史…最下位、１３点
総合薬学…７５位、３８点
数学…最下位、１５点

詠唱術…首位、２２５点（来期分加点）
魔獣環境学…首位、２２５点（来期分加点）
合計点…６７４点
《所見》
第８代目ハンプティ・ダンプティは、極端な成績で、特に歴史と数学は壊滅的ですが、名家に相応しい成績も収めています。
上半期の主な成績として王国立中央決闘会年少の部で優勝（最年少記録）、６年生との非公式対外練習試合に全勝、３等級魔獣環境巡検資格の取得があり、これらの功績は来期の考査点に加点されます。
今後の課題は必須科目の改善です。
……
ご覧の通り、１年生の中で圧倒的な成績を残し、同級生や教師だけでなく、上級生にさえ、その偉業は轟くことになった。

◆

あまりにも存在感の強すぎる生徒が居たので、軽く尾行したり、決闘士倶楽部所属の上級生に聞き込みをしたり、ベディが聞いた噂話を検証したりして、少し調べることにした。
ハンプティ・ダンプティ８世。
毛が一つもない禿頭で、顔は丸く、艶のある卵白の様な肌も相まって、まるで卵の擬人化だ。
体格は６、７年生の男子生徒と同じかそれ以上に大柄で、授業中だろうが決闘中であろうが常に何かを食べているため、かなり太っている。
目は常に充血していて、偏頭痛持ち、典型的な魔力性多血症の症状だが、食堂での様子を窺っても霊薬の服用している様子は確認できなかった。
性格は少し精神遅滞しており、どこか図々しいが気前も良く、娯楽が好きで無教養。
杖は木製の短杖…と言うより、もはや短めの棍棒。

外観を見る限り、塗装や装飾などをしていないほぼ生木のようだったので、直ぐに阿利襪（オリーブ）の木を素材にしていると特定できた。
阿利襪の木で出来た杖は硬くて重く、勝利や生命の象徴に結び付けられるほど、詠唱術と相性が良く、発声詠唱だけでなく無言詠唱や動作詠唱でも効率的かつ適正な出力で発動できる、高価な素材だ。
ちなみに、流石に杖芯までは特定できなかった。
主な功績として、本来は倶楽部活動が出来ない1年生にも関わらず決闘士倶楽部に顧問教員と在部生からの特別推薦枠で所属。
他校生や在校生との練習試合で無敗、決闘会年少の部で最年少優勝記録がある。
圧倒的な実積によって、本来必須科目なので一度でも基準点を下回れば原級留置されるはずの考査で最下位を取ったにも関わらず、特別に進級が許可された化け物である。
コイツを戦力として確保できれば、今後の計画がかなり有利になる。
買収や色仕掛けや交渉など、色々と手を組むための手段はあるが、普段の無茶苦茶な素行を見る限り、こちらの実力を示さないと、話を聞いて貰える事すら拒絶されそうだと感じた。
実際に決闘している様子をこっそりと覗いてみたが、
正直な感想、一対一でまともに殺り合えば、絶対に敵わない。
闇討ちや人質作戦以外で勝てる気がしない。
なので、何か勝利あるいは交渉への手掛かりを見つけるために、ダンプティ家について調べようと、深夜に図書館に篭ったり、貧民窟の情報屋を端金で雇ったり、過去の新聞を軒並み洗ってみたら、かなり興味深い来歴を発見した。
ハンプティ・ダンプティ家は112年前から存在する家系だが、初代から今代まで、
全員、近親婚で産まれている。
理由は定かではないが、初代ハンプティ・ダンプティは、実の妹であるロリーナ・ダンプティと14歳で結婚した後、妻に対して、中央魔法院に対してずっと隠していた、密かに開発した呪術を2つかけ

た。

1．子どもは必ず一男一女で産まれる。

2．子どもが14歳になると兄妹間で必ず発情する。

そして、初代ハンプティ・ダンプティは長男に2代目ハンプティ・ダンプティと、長女にロリーナと名付けた。

この悍ましい、異常で、狂気的な伝統は、今代に至るまで続いている。

過去の新聞の記述によると、初代以降のハンプティ・ダンプティ達は皆、多血質で精神遅滞で決闘に強く、妻を愛し、そして孫と顔を合わせることが出来ないほど短命であった。

#8

深夜、東棟地下、ルーシーの個人研究室。
いつも雑多な机は、今は綺麗に片されており、その上には銀色に輝く粉末が小分けにされて布袋に詰められており、更にその横には即日支払用紋章券が束となって置いてあった。
「やっぱ現金は無しか」
「ほとんどが毎月配給で配られる券の中で一番高いヤツやぞ、換金ダルいくらいでグダグダ抜かすな」
煙草を吹かしながら紋章券を一つ一つ鑑定しつつ、手記にそれぞれの金額を書いていく。
取引(ビジネス)だ。
リーゼとルーシーは、主に学院外の治安の悪い地域を対象に、自前で製造した『魔薬』を亜人、半亜人のみを相手に売り捌いていた。
リーゼが入学する半年程前から、二人で共謀し、かつての想い出の家から回収した魔薬を解析し、個人研究室を使えるようになってからは秘密裏に量産、路地裏を縄張りとする裏の連中に目をつけられないよう、慎重に取引相手を選別しながら、少しづつ金を回収していた。
裏路地の粗末な公営住宅に住む亜人と半亜人は、主に郊外の大規模農園か、缶詰・布織工場で労働しているが、疫病や身体障害を原因に働けない亜人達には、税金を資金源とする公共運営資金から、月毎に即日支払用紋章券が配給される。
しかし、公共住宅が並ぶ貧民窟は公共施設も公道も少なく、そこを根城とする賭博師や禁術師、賄賂で多少の指定禁術の通報を見逃す警邏、魔薬の製造と販売を請け負う悪党の集団によって、半ば無法地帯と化しており、複雑な通路によって私有地と国有地の境目が曖昧な為に、結界の精度は時が経つに連れて杜撰になってしまった。
娼館に勤務する黒耳族(ダークエルフ)は避妊する魔術を必ず習得する様に指導されるが、路上売春をする未成年の黒耳族は避妊が出来ず、更に育児放棄や無法者達に人身売買するので、亜人や半亜人は、年々数を増やし、その度に治安が悪化し、オウェル王国の深刻な社会問題と化してい

た。
が、彼女たちにとってそんなことはそれ程大事では無かった。
むしろ、金蔓が増える要因でもあるし、増えすぎても最終的には民族浄化（ジェノサイド）するので、今のうちに稼げるだけ稼いでおこう、とすら思っている。
「それより、今年はこのまま小金稼いで終わりなんけ？誰かシバかんの？」
「ナローは将来的に考えたら厄介すぎる、消すか最悪追放しなきゃ豚箱行き確定だ、可能なら今年、最低でも3年に上がるまでに」
「卵野郎は？」
卵野郎とは勿論、ハンプティ・ダンプティ8世の事である。
「出来れば躾してから飼いたいが……」
「噂によると、ウチの同級の部員みんなド突き回されとったらしいで、しかも一発も入れれずに、シバいて躾んのはやめといた方がええんちゃうの、知らんけど」
「……流石にあんな化け物と殺し合うくらいなら、丸め込んで引き込むしか手はないな」
机には新しく、過去の新聞や情報屋から集めた手記を広げ、徐に立ち上がると、埃を被った車輪付きの黒板を引っ張り出して、白墨で色々と書き始めた。
ハンプティ・ダンプティ8世。
112年前から近親婚を続けている気狂い一家。
歴代の卵野郎共は、意外にも職種はバラバラで、なんなら中央魔法院に行った奴さえ居る。
過去にブン屋に取材された記事を見ると、亜人に人権を与えることに対してかなり批判的であり、純人の人権と安全を優先する方が大切と説いている保守派の家だそうだ。
現在、亜人の待遇改善で中央魔法院も内閣府も揉めに揉めている状況のせいで、その勢力は衰え始めているが、かつての先代達が残した功績が強いため、まだまだ根強い人望があり、味方も敵も多い家だと考えられる。

また、様々な証言を見るに全員が全員、愛妻家で、いつまで経っても新婚のように暮らしていたとのことだ。
今の所、選択肢は二つ、懐柔か脅迫。
懐柔では完全な制御はできないが、叛逆される危険性は著しく低い。
脅迫では一時的に完全な制御が可能だが、後にその恨みが倍になって帰ってくる可能性がある。
「…懐柔でいこう」
出した結論は、安全策だった。
苛烈で暴力的な普段の思考とは裏腹の、リスクを排除した決断だった。
対面は、意外そうな顔をして、少しだけ好奇心を覗かせた。
「…ちなみになんやけど、決闘、直で観たんやろ？具体的にどこがヤバいんその卵野郎」
「……詠唱術ってあるだろ」
「おん」
「その中でも三つの種類に分かれているのは知ってるな？」
「結論から言えや、1箱全部吸い終わるで」
「発音詠唱と無言詠唱と動作詠唱を近接格闘しながら並行して全部使ってくる」
「は？マジ？」
目を見開いて、硬直した。
「マジ」
「えっなに、つまり…口で詠唱しながら、頭ん中で別のを詠唱してて、杖とかでド突きながら、その殴る動きで動作詠唱してるってこと？一回に最大3種類の違う攻撃魔術を殴りながら出してくんの？」
「そう、因みに拳闘にも秀でてる」
「…ホンマにホンマ？」
「……おう」
今度は、口からポロリと、まだ結構残っているにも関わらず、煙草が地に堕ちた。

「きっしょ」

◆

西棟1階にある決闘士倶楽部の、部室の前で、革の外套を着た少女が、珍しく煙草を咥えないで、静かに佇んでいた。
そして、扉が開かれる。
「だれ？」
「はじめまして、ハンプティ・ダンプティ8世君」
和やかでは無いにしろ、握手を求めてきた少女に、純白の肌を保つ少年は、少し困惑しながら、それでも優しく応えた。
「少し、お茶したいんだが、どうかな？」
「えっ、いい…？けど？飲むだけ？お茶…」
「…少し、おしゃべりしようって事だ」
「なに話すの？今日のご飯？」
「……いい喫茶店があるんだ、着いてきてくれ」
とうとう律儀に回答する事がなくなり、溜め息混じりに踵を返してスタスタ歩き始めた少女の背を、慌てて追いかけながら、彼はこう言った。
「それっておごり？おごりなの？」
…そうして、学院外の町の、小さな喫茶店に、二人で入った。
中々お洒落な内装で、客も少なく、丁寧に飾られた本棚には几帳面に様々な本が分類ごとに並べられている。
が、そんな事には目もくれずに品書きばかり見る目の前の少年。
なんだか変に緊張し過ぎていた自分が情けなく思ってきたが、そもそも未だに本題に入っていないので、すかさず、密かに心の中で喝を入れ直した。
「で？おごりなの？」
「奢りでいい」
「っしゃあ!!お兄さん！注文！レモラ煮とケルピーの刺身とファラリスの乳粥！あと紅茶！銘柄はマンドレイクで!!」

奢りと分かった途端に迅速に店員を呼び、凄まじい勢いで注文していくその様は、無邪気というよりは無神経と言えた。
「で、きみは？なに食べんの？」
「紅茶だけでいい、君と同じ銘柄で」
「ふぅ～ん、あっ、お兄さん注文以上ね」
今まさしく舌戦が始まるとは、とても言えない雰囲気で、リーゼは櫛で髪を整えながら、ふと、思い立ったように、あっ、と言って、店員の背を呼び止めた。
「灰皿貸してください」
「ここ禁煙です」
「えっ」

◆

学園長の執務室。
中間考査の結果を元に、第１０１期生の指導要録をまとめる為、アリス・モンタギューは、右手に木筆、左手に判子、更には念動術で書類を運んだり、木筆や硬筆を動かしていた。
一見すると、長期課題を最終日にまとめて終わらそうとしている幼年学生にしか見えないその姿は、実は学園長としての責務を果たしている立派な教職員の仕事風景なのだ。
そうして、事務作業をしながら、対面で同じく指導要録を確認している灰色の背広を着た教師に話しかけた。
「第１０１期ヤバすぎんか？」
「雑談するよりも、手と術を動かしてください」
「動かしながら問いとるんじゃ」
「……」
論破されたので、灰色の背広の男、チャールズは黙り込んだ。
「ポンパドール嬢は言わずもがなじゃ、７００点が満点って言っとるのに、なんか限界突破した点数を取りおった、ナロー君は優秀じゃが正義感が強すぎて社交性が終わりすぎておるし、８代目卵に至っては

なんじゃあれ、7代目卵も大概だったが、もうアレは純人の領域超えとるぞい」
「優秀過ぎるというのも……考えものというか…」
「挙句の果てには、上半期でいきなり退学者が理由不明で出るし、眼光灯の調子が軒並み悪いし、露骨に成績下がる生徒が例年より多いし…なんなんじゃ、なんなんじゃマジで、ワシなんか悪いことしたか？化術(ばけじゅつ)極めたけどちゃんと中央魔法院に届出したのになんでこんなヤバい世代の責任者やらないといかんのじゃ！」
　とうとう下手くそな泣き真似をしながら駄々を捏ね出したので、チャールズは態とらしく中折れ帽を外して、咳払いを一つした。
「禁忌に魅入られそうなのは？」
「本命ナロー、対抗ポンパドール、大穴でセネル」
「…流石に大穴過ぎるのでは」
　さっきまで大袈裟に嘘泣きしていた瞳は、今は微塵も揺れていなかった。
「純粋で純朴な子ほど、悪に染まりやすいんじゃよ」
「……それは」
「はい指導要録終わりぃ！確認よろしくぅ！」
　念動術で吹き上がった全ての書類が、暴風のように中折れ帽を外した頭部に直撃し、風によって張り付いた全ての書類を剥がす頃には、既に下手人は窓から逃走していた。

＃9

アールヴ・ナローには秘密がある。
彼の母は半亜人（黒耳族（ダークエルフ））と純人の小半（クォーター）の淫売だ。
避妊の魔術を使えず、昼は布織工場で早朝から夕方まで働き、夜は路地裏に突っ立ち、明日の夕飯代を稼いでいる、路地裏の大多数の1人だった。
少し他の大多数との違いがあるのすれば、その肌は他国の難民と変わらぬ程度の褐色だった事だ。
寝床に毛布を敷いて貰ったし、飯も食わせて貰ったが、ただ抱擁されたり、頬擦りするような、母として子を慈しむような事は、只の一度もして貰えなかった。
彼の父は結界術師らしい。会ったことはない。
いずれ忘れる淋しさを、いつか忘れる人肌恋しさを、ただ路地裏に捨てただけの、恐らく純人だと思われる。
母曰く、顔も声も、肌の温もりすら、もう忘れたらしい。
故に、真実は永久に闇の中だ。
ただ彼の、母と比べると、それほど尖っていない耳が、黒耳の血を薄める純人の痕跡だと思われる証拠だった。
幼少期、アールヴは靴磨きとスリで糊口を凌いでいたが、ある靴磨きをしていた日、いつも彼を贔屓にして、対して汚れてもいない如何にも高級そうな革靴を、跪いて拭く様をじっとりと観ていた一人の妙齢の女に、彼のその端正な容姿を見初められ、養子となった。
この時すでに母は流行病で亡くなっていて、天涯孤独で、大した生きていく為の力が無かったのもあって、まさに渡りに船であった。
連れられた館は、大きく、豪奢で、女中も多かった。
後に聞いたが、妙齢の女、その名をハーメルン・ナローは、こうして恵まれぬ才能のある子どもを、社会的に意義のある慈善活動として住居と食を提供し、ある程度の年齢になったら、自立できる様に支援して、社会への旅立ちの手助けをしているらしい。
彼は初めて自室という部屋を与えられ、半ば腐った穀物を喰う必要

もなく、濁った水を飲む必要もなく、それどころか風呂にさえ入れた。
その気になれば好きなだけ勉強出来たし、外に遊びに行く事も出来た。
彼は初めて人の優しさに、人が持つ善性に触れたと、思った。
母が見せた、義務的な世話は、貧困によって削ぎ落とされた情の欠片に過ぎず、それらを必死に繋ぎ集めようと、足掻いていた自分を、ひどく憐れんだ。
ある日、ハーメルン・ナロー、つまり義母に呼び出された。
しかも、彼女に寝室に呼び出されたのだ。
何か粗相をしたのか、と不安になった。
初めて、大声で怒鳴られるのかもしれないと思った。
怯えながら部屋に入ると、義母は下着で寝そべっていた。目は少しだけ血走って見える。鼻息も荒く、てらてらとした舌が唇を濡らしている。
そして、彼女はゆっくりと口を開いて、そして、服を脱げと命じられ、大きな寝台に寝かされた。
そして、彼は純潔を失った。
少なくとも快感ではなかった。不愉快という程でもなかった。
只、淋しいと思った。
なぜ自分がそう思ったのか、後で思い返すと、自分はきっと、優しさから生まれる善性というものを、心の底では信じていたから、と思う。
その日から、彼は熱心に勉強するようになった。
稀に、女中が夜這いに来たので、あるがままに寝そべった。
身体を踏み躙るように、無理矢理抑えつけるように抱き潰される事もあった。
撫ぜる様な、愛玩される様な、愛おしく蒐集品を眺める様に、ぬらぬらと、快楽に対して執拗に抱かれた夜もあった。
欲望の捌け口として、あるいは模擬的な恋慕の標的として、あるいは歪んで行き場を失った母性の最終処理場として、彼はただ寝台に寝かされた。

それらを、歪んだ形の暴力であり、個の尊厳を食い物とする卑劣な行いと受け取ったが、耐えた。
窓から差す、朝に昇る太陽の光が、あまりに眩しくて、笑ってしまうほど眩しいと思った時、『まだ死ぬ気にはなれない』と、感じた。
更に、哲学と政治を好むようになった。
自分はまだ、性的な、野生的な暴力の連鎖の中で生まれた獣である、と仮定し、人で成ることを願った。
人と成る。
では人とは何か。
分からぬ者には成れない。人としての定義を自分で定める必要がある。
自分で定めていない者にはなれない。
まだ答えを探している途中だが、少なくとも、偏見に囚われず、公平で、厳格で、常に克己し、怠惰を許さない、所謂、法の番人と呼ばれる者こそが、本来の人であり、肌も耳も鼻も歯も髪も色も言語も文化も、法の遵守さえ成されているのであれば、そこに差違は無いと考えた。
故に彼は、結界術師となり、懸命に働いて出馬し、民院（この国は二院制であり、その内の一つ）議員となり、ある公約（マニフェスト）を実施しようと思った。
それは、亜人と半亜人を差別から解放する。
本来の運命では、その偉業は成される。
しかし、彼の前に立つ試練の壁は、知らぬうちに、大きく、分厚く、硬く、そして、過酷になっていた。

◇

この夢は、必ず忘れる夢だ。
感覚的に、分かるのだ。
目が開いた時。若しくは、いざ帳面に書こうと硬筆を手に取った時、必ず内容を忘れる。

◇

苛立ったので、思わずコントローラーをクッションに、ポイっと、投げてしまった。

「やっべ」

根が小心者なので、すぐさまあちこち触って確認して、接触不良とか起こしていないか確認した後、忌々しきゲーム画面を睨む。

「んだよこのクソボス、強すぎんだろが」

一旦、悪態を吐いてから、携帯に映る攻略サイトをもう一度身漁ってみる。

アールヴ・ナローの攻略。

褐色で眼鏡でロン毛で、根暗そうな、しみったれた辛気臭い面していて、いつもいつも陰気な事ばっか言ってるガリガリのイケメン野郎。

なんか亜人がどーたらとか言ってるが、知らねぇ。

シナリオがクソだから興味ないしちゃんと読んでないから。

物語の丁度半分に差し掛かる頃に、コイツと協力して、ハンプティ・ダンプティ8世とかいうデブの色白と戦うイベントがあった。

このデブ、やたらキャラ濃い。

見た目が濃い、顔が濃い、気になったので会話ログを見返してみると、キャラの背景（バックボーン）も濃い。ついでにシスコンらしい。

そして異様に強い。意味不明に強い。

1ターンで4回行動。最後は物理で固定とはいえ、3回は必ず多彩な属性を使って、着実に弱点をついてくる。

デバフもバフも余裕で解除してくるし、HPも高い。

あとなんか知らんけど、陰気褐色眼鏡クン（笑）とは思想が対立するらしく、ライバルキャラ的な立ち位置らしい。

因みにこれは余談だが、とあるネットの掲示板のスレで、『ハンプティ・ダンプティ8世様を人気投票1位にして女オタク泣かそうずｗｗｗ』とかいうクソみたいなスレが異様に伸び、コイツが何故か公式

サイトの人気投票で無双し、無駄に豪華描き下ろしイラストの壁紙が公開され、あらゆる掲示板やＳＮＳで祭りと化した。
もちろんクソ姉貴は憤慨した。
余波が俺に来たが、普通に無視した。

◇
ほら、忘れちった。
◆

色々と捏造しまくった資料を並べて、口八丁手八丁で、口から出まかせに喋る。紅茶が冷めているが知ったことか。
「えーっと？」
やっぱり、阿保みたいな面で疑問符浮かべて困っているので、ここが一番重要ですって顔して嘯く。
「つまり、君の家の『伝統』を違法にして、君達夫婦の、純愛を脅かそうとしている『悪いヤツら』が居るってことさ」
「ゆ、ゆるせん…今、ぼくすごい怒ってるぞ！」
「さっき、い…じゃなくて、奥さんの写真見せてくれただろ？すごい綺麗だし、気立ても良さそうだ…なのに、違法だぜ？犯罪だってんだよ？別に誰かをぶっ殺したりぶん殴ったり無理矢理決闘ふっかけたり物盗んだり女を犯したりしていないのに、犯罪」
「ゆ、ゆるせん…すごく怒ってる！今！」
「こんなの、どんな手を使ってでも妨害したり説得しなきゃダメだよな？そうだよな？」
「うん！怒ってるし！」
語彙力皆無かコイツ。
「さぁ、組もうぜ、お互いに助け合おう」
「うん！勿論！」
やったぜ。
「あっ、でも！その前に一つだけ言わなきゃなんだ」
……なんか、嫌な予感がするな。

「父様が言ってたんだ、誰かと協力する時は、『まずそいつと決闘しなさい』って！気高い魂の闘争の中で、互いの事を絶対に分かり合えるから、本気で、殺す気でやればやるほど良いって言ってた！」
何言ってんだコイツ。
「…つまり、私と決闘して、私が勝ったら、協力してくれると？」
「ううん、違うよ？」
「は？」
「ぼくの相手して『生きてたら』、一緒に頑張って、その…なんだっけ名前…ハローくん？とお話したり、ボコボコにしよう！ってこと」
うん、普通に勝てる気がしない。
「……了解した、いつ決闘する？」
「明日!!」
はやっ。
……が、ここで折れたら何のために『生き甲斐』を決めたのか。
それに、この歩く兵器みたいなのが戦力になるのだ。
腹を括ることにしたので、一先ず、煙草を吸おうと思った。
すると直ぐ横に気配を感じたのでチラッと見ると、見覚えのある店員が仏頂面で立っていた。
「だからここ禁煙ですって」
「あっすいません」
……やっぱ、まだ腹括れて無いかも。
すこし震える手で、煙草を木箱に仕舞い込んだ。
因みに、8世はさらに追加で色々と注文していたので、結構マジでイラッとした。

#10

決闘。

遥か昔、かつては必殺の術すら飛び交い、多くの魔術師が己の命と誇りを懸けて行った。

現在は扱える魔術には様々な規則や制限があり、主審や副審などの審判の監視と判断を以て行われているが、それは表の決闘であり、健全な競技だ。

各地の地方が主催した大会から、国の代表同士での試合などの国際的な大会まである為、新聞や雑誌などには常に様々な情報が載っている。

そして違法決闘。又の名を私闘。

度々、どこかの私有地や、貧民窟の違法闘技場などで、血気盛んな誰かによって行われている。

必殺の術などは勿論永久禁術指定なので使えないが、本来の表の決闘とは違い、審判もなければ制限された限定禁術指定も無い。

毎年、これでよく死人が出る。

様々な方法で事前に取り締まられてもいる。

しかし、何故か廃らない。

もしかしたら、皆、血が見たいからかもしれない。

深夜、訓練場。そこの結界は、所謂私有地の様に、学院内での決闘使用となっており、一部の限定禁術指定を扱える様になっていたり、自動通報の機能が排除されている。

そして眼光灯はまたもや眼振を繰り返し、出鱈目に光が点いたり消えたり、まさしくそこは無法地帯であった。

爆破跡。血痕。硝子の破片。

床は所々割れていて、抉られ、そこに二人の闘士が、向かい合っていた。

片方はハンプティ・ダンプティ8世（以下、8世と呼称する事とする）、大柄な男で、色白で、血走った目と充血した唇は弧を描き、棍棒のような短杖を握っていて、額からは血を流し、服はあちこちが破れ

たり煤けたりしていて、肩や太腿の箇所は血で滲んでいる。
しかし、それでも、ニタニタと、悦んでいる。
片方はリーゼ・ポンパドール＝ダックテイル、背の高い女性で、革の外套を着ていて、整髪料で髪を撫で付けていて、目立った外傷こそ見当たらないが、脂汗に塗れた焦燥とした顔で、其れでも油断なく、少しばかりひしゃげた金属の杖を握りしめながら、乱れた息を整えている。
唐突に、８世の乾いた音の拍手が、静謐な訓練場に響き渡った。
「すごいね！規那（キナ）の樹液を混ぜた水で描いた紋章か…確かに君が『光の術』を当てて術式を起動するまで、地面に仕込んでいたのは見えなかったし、確か『詠唱術に因る爆破の術』は５年前に限定から永久に繰り上がっちゃったもんね、面白い発想だし、事前に罠を仕掛けているのはとっても良いよ！すごく良いっ!!満点！花丸満点!!」
規那の樹液は、主に特定の原虫に因る感染症の特効薬の原料となったり、特定の清涼飲料水に香料や糖分と共に微量に添加されている。
様々な効能を持つが、その中でもリーゼが目を付けたのは、ある一定の波長の光を当てると、発光するという特性だった。
『光の術』は一般教養魔術の中でも基礎中の基礎の魔術であり、最も一般的で、魔術についての知識が少しでもあれば、老若男女誰でも扱える術だ。
それ故に、詠唱を短縮したり改変したりするのは非常に容易で、すぐにその『一定の波長』の光を、光線のように射出できる術式に改変した。
８世に決闘を条件に出されたその日の深夜から早朝にかけて、リーゼはすぐに規那の樹液と希釈した黒胆汁、そして精製水を混ぜて瓶に詰め、床に大小様々な発光を起動条件とする『爆破の術』の紋章を描いていた。
決闘開始直後、彼女は出し惜しみせず、問答無用で、文字通り光の速さで爆破紋章を全て起動し、８世は錐揉みしながら、血を流しながら、大きく吹っ飛ばされた。
額から血を流しながら、地に伏せるその姿を見て、勝利を確信した。

が、ムクリと立ち上がり、煤けた上着を脱ぎ捨てる８世を見て、リーゼは戦慄した。
そして、暴風が吹いた。
いつの間にか、目前に現れた、筋肉と魔力の根塊は、短杖で大振りに殴りかかり、それを金属の杖で受け止めると、あまりの力の差に、その腕は震えて痺れた。
勢いを殺す為にその力の向きに流れるように後ずさると、不意に背後からジリジリとした殺気を感じたので、背面全てに『防壁の術』を、無言で詠唱した。
背後から、壁を叩くような、窓の硝子を殴るような、暴力の音色が、耳の直ぐ後ろまでに響いているが、目の前で振るわれる杖を無視してまで、振り返って確認する選択肢は、欠片も頭に過ぎることは無かった。
杖による殴打の追撃は、体を逸らして避けた。
視界の端から襲ってくる火炎の術には、消火の術をぶつけて相殺した。
他にも鎌鼬、念動に因る殴打、麻痺、閃光、爆音など、多彩な魔術が、目の前から、視界の端から、そして恐らく、背後からも襲い掛かって来た。
その度に、口で、脳内で、時には杖を振るって術式を詠唱し、その全てに対処した。
度々、リーゼは隙をついて、外套の裏に仕込んでおいた、様々な霊薬が入った試験管を投げつけて、目眩や吐き気を催させようとしたが、大体は避けられてしまったし、何より驚いたのは、偏頭痛を引き起こす霊薬を、顔面にモロにブチ当てたのに、ケロリとしていて、何にも効果が無かった。
霊薬は使い切った、呼吸が苦しいので、詠唱にも限界が来ている、身体強化の刺青が入った箇所が焼ける様に痛い。
それでも、暴風が止む事は無く、寧ろ益々盛んになってきた。
一体、何本、硝子が割れたのか。
一体、何度、魔術を撃ち合ったのか。

一体、何合、杖を打ち合ったのか。
一体、何回、鈍音が響き渡ったのか。
一体全体、何時間経ったのか。
少し間合いが開けた。
乱打は止み、気づけば8世は、恍惚とした顔で、拍手をしながら、もう堪らないとばかりに、一人でに喋り出したのだ。
「いやぁ～いいねぇ！君は執念深いし、勝利への渇望も凄い！その油断ない目もね！術の捌き方も的確だし、杖で打撃を受け流しながら、ぼくの動作詠唱を妨害しつつ、君もその動きを動作詠唱に活かそうとしていたね！素晴らしい！」
「…事前に罠張ったんで、卑怯って言われると思っていたよ」
「どうしてだい？卑怯なものか、闘いは合図と共に始まるものではない、事前に勝利の為のあらゆる布石を打つのは当然の事だよ！ぼくから言わせて貰えばね、闘う直前まで何も手を尽くさないヤツは、ただの怠け者だね！」
吐き捨てる様に、大袈裟に叫んだ。
不意に、リーゼはゆっくりと、首を捻った。
何か、凄く嫌な予感がしたからだ。
8世の大きく開けた口から、まるで岩漿（マグマ）の様な熱量を持った、赤い液体が、勢い良く射出され、さっきまで頭があった箇所を通った。
顔の真横を通りすがっただけで、頬は焼け爛れ、右目に激痛が走って、更には開かなくなり、顳顬から顎までかけて、ジンジンと火傷の痛みが覆った。
これは『熱瀉血の邪術』。
限定禁術指定の邪術だが、決闘の際には一応使える術式だ。
自らの血をさながら岩漿程に熱し、それを口や耳などの器官から発射する、不意打ちに特化した攻撃魔術。
当たれば忽ち大火傷。熱に弱い物や衣服を一瞬でダメに出来るし、それなりに鍛錬すれば口を開くという動作だけで詠唱が可能だ。
しかし、その邪術は誰も使おうとしない。
何故なら、そもそも習得難易度が高い事、焚書された本にしか載っ

ていない魔術だという事。
　そして、血液中にある魔素を膨大に消費する必要と、それを体内で生成する際に、自らを焼いてしまわないように器官から出す直前まで熱を制御する必要があるからだ。
　これは余談だが、遥か昔、この『熱瀉血の邪術』で多くの金庫や牢獄に穴を開けた、『岩漿吐きのヴェルグウルド』、その最期は、膨大な熱量を持った血液を制御できず、食道で詰まってしまい、喉から手足の末端にかけて、体内から徐々に火傷して、死んだ。
「血をそんな滅茶苦茶な使い方して不意打ちするのは、流石だな、一瞬反応が遅れていたら、首から上がその熱量でドロドロに溶けていたよ」
「ふふっ、うん」
　彼の少年の様な高い声は、この時既に低く嗄れていた。
　恐らく、完全な制御をせずに、放ったのだろう。
「さて、今、どうだ？」
「うーん、身体は貧血で動けないなぁ」
　堂々と立ってはいるが、やはり彼の言う通り、立っているだけだった。
　その証拠に、彼の脚と杖を握る手は、僅かではあるが、小刻みに震えていた。
「じゃあ、私の勝ちでいいか？」
「なんで？まだ、ぼく降参してないよ」
　不敵な声を聞いたので、革の外套の衣嚢から、一枚の羊皮紙が取り出された。
『術式遅延結界展開』の紋章が描かれている。
　それを勢いよく破ると、訓練場全体を、透明な何かが覆った。
　徐に、懐から煙草を取り出して、咥えた。
「…【火】」
　火がついた煙草を一息だけ大きく吸って、深呼吸の様に、ゆっくりと紫煙を吐いた。
　振りかぶって、まだまだ残っている煙草は投げ捨てられた。

「今から君が、負けた、と言うまで滅多打ちにする」
「最高ぉ!!!!」
刹那で詰められた間合い。風を切る音。
打つ。打つ。打つ。打つ。
上段から大振りに振り下ろされる金属の杖。
影だけ見れば、まるであくせく働く炭坑夫だ。
８世は貧血状態で、頭はボーっとしていて、さらには結界の効果で、互いに魔術が使えない（厳密には発動できるが、結界の効果によって術式が遅延しているので、時間がかかってしまう）。
故に、今この場は、ただの肉体と肉体のぶつかり合いでのみしか、相手に攻撃できない。
金属の杖は、もう酷く曲がってしまったので、ポイと投げ捨てて、リーゼは拳で殴った。
拳頭は切れ、血が流れているが、気にせず、鼻の下の人中や、眉間を中心に殴り続けた。
８世が体勢を崩して地に伏せたので、すかさず馬乗りになり、顔面を執拗に殴り続けた。
この時、もはや狙いをつけず、滅多矢鱈に、ただただ拳を振り回した。
殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。
いつの間にか、拳にはへし折れた前歯が突き刺さっていたが、必死に殴り続ける彼女は気付かなかった。
とうとう、あまりに殴ったので吐き気を催しえずいて、荒くなった呼吸は、過呼吸寸前だった。
「はぁ…はぁ…」
「身体強化の刺青とか入れてるよね？…すごいなぁ…興奮してきた…君みたいな決闘士が増えてくれたら…ぼくももっともっと強くなれるのに…そうなればぼくはロリーナちゃんにとって…最高の旦那さんになれちゃうなぁ……この世の凡ゆる悪から護る…最高の夫にして騎士様だぁ……成れちゃうなぁ……憧れちゃうなぁ…」
鼻が曲がり、前歯はガチャガチャにへし折れ、顔は血塗れで青痰塗

れ、目頭は腫れていて、悲惨な面構えであったが、結局最後まで、朦朧としてはいるが、恍惚とした表情は崩れなかった。
「はぁ…はぁ…どうだ、組むか？…私、と…」
「うん、君最高、一緒に色々と、面白い事しようよ」
「…これ、からは、退屈、させない、」
息も絶え絶えに、辛うじて絞り出した返答に、満足気に頷き、グルリと黒目は瞼に向かって飛び上がり、充血した白目を晒しながら、８世は気絶した。
「…はぁ…はぁ…無茶苦茶ヤバかった……もしコイツが昨日『今すぐ決闘しようよ！』とか抜かしていたら、負けていたのは…はぁ…私だった…」
薄暗い訓練場に、ポツリ、と荒い息と共に、独白が漏れた。

資料：一般魔術教養

○はじめに

一般魔術教養とは、現代において我々に必要不可欠な魔術についての教養を深める為の知識並びに知見であり、これらを習熟することで普段の生活をより豊かにするものである。

これらを深く学ぶことで、学生として模範的な魔術の研究に役立つ事があれば、先人たちが研究に捧げた過去に報いることが出来るであろう。

1章：術式

魔術とは、様々な術式と魔素を用いることで引き起こす事が出来る現象である。

一般的な魔術体系は、詠唱術、錬金術、霊薬術、紋章術がある。

更にその中でも、邪術、妖術、呪術、化術、念動術、属性術、錬丹術、水薬術、丸薬術、粉薬術、印形紋章術、壁画紋章術、紙面紋章術など、数多くの派生魔術体系がある。

これら全てを含めた術式（発音、書式、調合法、印形）は、中央魔法院に届出されたものだけで、約１６０００程であり、更にそこに届出されていない違法術式（禁術）も含めると推定で約２００００にも上ると発表されている。（１９７９年の際の資料を参考）

○魔素

魔素とは、体内で生成される体液内に混和する魔術による干渉現象を引き起こすための源泉である。

主に術式を発動する際に消費されたり、錬金術や霊薬術の素材として利用される。

公暦１７２１年にユナニ・ピポテラスが発表した論文『四体液説』でも書かれている通り、体液中に含まれている魔素は、各種体液によって性質が異なり、詠唱の際に消費される『血中魔素』や、錬金術の際に金属粉末と魔力性液剤の混和を誘発する『黄胆汁魔素』などがある。

また、過剰な詠唱によって体内から魔素が欠乏した際は『魔素欠乏症』が発症する場合がある。

これは人体の恒常性（ホメオスタシス）を保つ為に脳や臓器から魔素を分泌する作用が通常よりも早急に発生し、その体内環境の急激な変化によって身体に様々な悪影響（目眩、動悸、嘔吐反射など）を与える症状である。

●補足

ユナニ・ピポテラスは、多血質（最も血液に魔素が含有されている比率が高い体質）の人間の気質や性格がある程度同一だった事を発見し、どの体液に魔素が多く含有しているかで、個々人の気質や性格に影響を及ぼしているという、『四気質論』を公暦１７２３年に発表した。

論文によれば、『多血質』『黄胆汁質』『黒胆汁質』『粘液質』には典型的な気質の類型がある。

なお、これらの体質は遺伝によって先天的に生まれ持つが、長年の食生活の変更や生活習慣の変化によって、稀に後天的に体質が変わる場合がある。

・多血質

比較的社交的で、図々しいが気前もいい。

第二次性徴の発現が早く、性欲が旺盛である事が多い。

体質は筋肉質で、脈は規則的で皮膚はぬくもりと弾力があり、胃は丈夫だが太りやすい。

血中魔素は詠唱術との親和性が高い。

・黄胆汁質

短気で行動的、野心も強い。気前がいいが傲慢で、社交性が低く気難しい面もある。消化力が高く大食だが、やつれて見える。脈が速く心臓に負担がかかる気質で、肝臓や腎疾患に陥りやすい。

黄色味がかかった乾燥した肌をしており、硬くて水気に乏しい筋肉をしている。

黄胆汁中魔素は錬金術との親和性が高い。

・黒胆汁質

寡黙で頑固、孤独癖があり、運動も休養も社交も好まない。強欲で倹約家、利己的で根に持ちやすい。神経質で自殺傾向がある。注意深く明敏、勤勉で、一人で思索に耽ってばかりいる。黒胆汁は主に狂気・

精神錯乱と関連する体液といわれたが、天才を生み出す体液だとも考えられた。土気色で乾燥した冷たい皮膚をして、たいてい痩せている。脈は遅く耳は遠い。欠尿症や便秘や下痢になりやすい。

黒胆汁中魔素はほぼ全ての術式との親和性が高い。

・粘液質

精神的に鈍く優柔不断で臆病だが、おだやかで公平、人を騙したりしない。背は高くなく極端に太っているか痩せている事が多い。血の気のない皮膚の色で、肉質はやわらかく肌は湿っている。脈は遅く弱く胃弱で下痢や末端冷え症になりやすい。貧血や腺病、風邪に罹りやすく、耳鳴りや難聴になりやすい。

粘液中魔素は霊薬術との親和性が高く、特に水薬との相性は非常に良好で、実験や調合の為に粘液を買い求める霊薬術師相手に、唾などの粘液を売買する業者も存在する。

○詠唱術

詠唱術とは、口頭による発音（発音詠唱）、文面に書き起こした詠唱文（書体詠唱）、思考による詠唱（無言詠唱）、または動作による表現（動作詠唱）によって魔術的効果を発動する術式である。

最も一般的である発音詠唱は、術式を直喩または比喩する文言の羅列を発音することで、体内にある魔素が含まれる体液（主に血液）が消費され、発音された文言を再現するために空間または人体に干渉が発生する。

詠唱の際には脳内に強い想像で、魔術的に干渉された状況を正確に予想する必要があり、魔術に対する信頼感と具体的な効果が再現される為の知識が必要となる。

つまり、詠唱術とは想像を現実に干渉させる術式である。

・例文

【我が内なる火よ、目前の木を燃やせ】

これは火炎術の一般的な口頭詠唱の術式であり、これを具体的に想像しながら、正しい調音と抑揚で一定の速さで発音することで、体内の魔素が消費され、この術式は完成され、現実に干渉し火炎が発生する。

なお、【】内に書かれた文字は術字であり、一般的には書式詠唱に使われる。
術字は主に資産購入契約や後払い決算契約の際に使われる。
無言詠唱は、脳内で術式の文言などを思考し、発音せずに発動する詠唱術である。
この際、他の詠唱と比べて非常に強い想像を働かせる必要があり、また公暦１８８０年にウェスパー・ヴォルフ・ラスペニア・パーシルが発表した論文『各種詠唱による魔素消費率の比較』によると、無言詠唱による魔素の消費率は各種詠唱の中で最も消費率が高い詠唱方法であった。
動作詠唱は、身体、杖、魔導書、武具、文房具、掃除用品、食器などの術式媒体を用いてある一定の動作や、舞踏、演武などによって詠唱される術式である。
これらの動作詠唱は、一般的には発音詠唱と組み合わされる事が多く、身体を自身の想像のままに動かすことで、より具体的な魔術的効果を脳内で想像し易くなる為である。
・詠唱の短縮および改変
術式の文言に描写する必要がない不必要な文言があったり、文言や動作によって発動する現象に合点がいかなかったりした場合は自由に術式を短縮したり改変したりすることが出来る。
これは一般的な風潮や風聞によって左右される事が多く、例として火炎術は老若男女誰でも使っているので、自分にも出来るという確信や火は魔術で起こすものという常識によって、容易に想像や予想がし易く、また数多くの魔術師が術式を改変した、短縮したと発表したり、様々な場面で披露しているので、術式の短縮および改変の難易度はかなり低いと思われる。
○錬金術
最も狭義には魔術的手段を用いて卑金属から貴金属（特に金）を精錬しようとする試みのこと。広義では、金属に限らず様々な物質や人間の肉体をも対象として、それらを錬成する試みを指す。
なお、公暦１６１３年からは人体の錬成は永久禁術指定となってお

り、仮に人体錬成を試みて逮捕された場合は、終身刑または死刑である。

・蒸留精錬法

卑金属を溶液化したり気化させるなどして他種類の金属粉末と魔力性液剤と体液を混和し、再度凝縮または凝結することで、目的の金属や物質を混和物全体の質量と同じ量で精製する方法である。

金属粉末の調合割合や使用する体液、卑金属の性質、加熱時間、攪拌時間などを綿密に考慮する必要がある為、設備や用具が整った研究室や実験環境が必要不可欠である。

なお、貴金属の錬成には事前に中央魔法院へ届出する必要があり、また、公務錬金術師資格と錬金監督員が必要である。

届出にない貴金属の錬成は違法であり、逮捕された場合は１０年以下の収監および実験用具の押収、研究室の差押え、資格の失効である。

●補足

大東亜華国や日出国では錬金術に似た『錬丹術』という魔術体系が存在する。

こちらが卑金属から貴金属の変換を主目的としているのに対し、あちらは丹薬を精製する事が主目的となっている。

そのため錬丹術はこちらの錬金術と霊薬術が合わさった様な術式と言える。

◆

深夜、女子寮談話室。

カリカリ、と硬筆が帳面を滑る。

ベアトリックス・セネルは勤勉だ。

普段から色々とリーゼに授業内容の予習や復習を手伝ってもらっている。

だが、中間考査を目前にすると、リーゼは少しだけ付き合いが悪くなった。

セネルは、流石のリーゼも考査前に人の面倒を見る余裕は無いのだ

ろうと思い、こうして自主的に勉強をする事にした。
現在勉強している『一般魔術教養』は必須科目だ。
万が一にでも赤点を取ってしまえば、態々自分に時間を割いてまで教えてくれていたリーゼに申し訳が立たないと思い、彼女は今復習している。
ふと、ゆらゆらと湯気を燻らす紅茶を見て、何となく硬筆を置き、一啜りして、ほう、と一息ついた。
そういえば、リゼさんは今どうしているのだろう。
ここで彼女は、ただただ自分が勉強を見てもらって世話になっているばかりで、ロクに彼女のことについて知らない事に気がついた。
中間考査が終わったら、一緒に喫茶店に行って、少し新鮮な環境と気持ちで他愛もない話でもしよう、と思い立った。
思い立って、彼女は地図を自室に取りに帰り、学院に近い喫茶店なり何なりを探したり、財布と睨めっこしたりしている内に、結構眠くなってしまったので、さっさと硬筆と帳面を仕舞って、少し冷めた紅茶を一気にグビっと飲み干して、覚えたての洗浄の術を唱えた。
ピカピカに綺麗になった陶器の紅茶碗（ティーカップ）を見て、気分が良くなったので、自室の引き出しに隠した秘密の帳面に詩を書いた。
これは誰にも明かしていない秘密の趣味、もしいつか明かすなら、この学院に入って最初にできた友だちである、リーゼに話そうと思った。
あの、いつも無表情で氷の様な顔貌がどう変化するか、少し気になってきたので、いつかとても気分が良い日が来たら、彼女に打ち明けてみて、詩の出来を評価してもらおう、と思いながら、枕を抱きしめて眠った。

#11

放課後。執務室。

アリス・モンタギューは、執務机に置かれた数十頁に亘る『事前研究計画書』を、鼻目金(メガネ)をかけて熟読していた。

その合間にも、計画書を提出した張本人、リーゼ・ポンパドール＝ダックテイルは、微塵も緊張せず、黙って成り行きを静かにただ待っている。

全てに目を通し終えると、ふぅ、と一息ついてから、手を組んだ。

「ふむ…」

ここで、彼女が提出した『研究計画』の概要を確認しよう。

『深刻な心的外傷治療の為の忘却水薬の一部改良による二重思考療法』

忘却水薬。

オウェル王国中央魔法院国土管理部交通結界課が管轄の第1級霊水脈、レーテー川に流れる稀有な魔力水質から採取された霊脈魔素を素材とし、公務霊薬術師の手によって生成される水薬。

その価格は高価で、生成できる霊薬術師も数少なく、専門性が高く製法の守秘義務も存在するため専用の資格と資格取得の為の国家公務試験も存在するが、あまりの難易度に中々合格者は出ず、後継者の減少が絶えない。

そのため価格は年々高騰して来ている。

忘却水薬の効能は一部記憶の忘却であり、その記憶は服薬した人間の脳から綺麗さっぱり消滅するため、その効能を利用した深刻な心的外傷の治療などに使用される事が多い。

しかし、心的外傷の要因となった一部の記憶のみを綺麗に抹消するのは非常に難しく、副作用として外傷体験前後の記憶の混濁、外傷体験に関与する一部宣言的(エピソード)記憶や手続き記憶の混濁及び忘却などである。

また、服薬による副作用には個人差が強く、人によっては一部どころか全ての記憶が喪失する可能性もある。

今回の研究では忘却水薬の一部改良によって、忘却対象である記憶を服用者の外傷体験では無く、個人の『信仰体系（ものの見方）の中に存在する中立的観念』に移す事で、外傷体験による当時の精神的な衝撃（ショック）は記憶しているが、恐慌や無力感または戦慄などの当時の実体験によって感じた『感情』は完全に忘却している状態にする。

そして自分の心の中にある対立した観念、つまり『自分は精神的に衝撃を受けたという記憶』と、『その際に感じていた感情の忘却』が同時に作用し、双方によって生み出される自己矛盾（絶大な精神的衝撃として現在も記憶してはいるが、現在の感情的には全くの無感動である）の存在を完全に忘れる事になる。次に、自己矛盾を忘れたことも忘れなければならない。さらに矛盾を忘れたことを忘れたことも忘れ、以下意図的な忘却の工程を定期的な通院と服薬によって複数回繰り返し、服用者の深刻な心的外傷の完治となる。

この治療法の確立によって、今まで深刻な心的外傷を味わってきた患者の多大な精神的苦痛を和らげると同時に、心的外傷性障害によって外傷体験の記憶が混濁してしまった重要参考人の宣言的記憶の聴取が可能となり、未解決事件の犯行の重要な証言を得る事まで可能となる。

更に、現在の忘却水薬の問題点である個人差による記憶範囲の増減も、記憶では無く、自己矛盾、つまり、『（当時の記憶を）覚えているが、（当時の感情は）覚えていない』という、精神のごく一部に作用するように調整することで、そういった服薬事故の可能性を著しく低下させる事が出来ると推測される、といった旨が書かれていた。

研究の概要に関してはこういった内容であったが、他にも過去の水質調査による魔素割合の推移や、改良の為の調合法の仮説とそれを立証する為の検証用研究用具や試験液の一覧、服用後の具体的な療法の指導要録、仮に治療法が確立した場合の販売価格と供給量、公務霊薬術師の動員と後継用資料の整理、仮に療院で運用された場合を想定した採算終始決算表の予測など、研究内容だけで無く研究によってどうなるか、どう運用していくかまでも綿密に練り込まれており、その完成度に思わず感嘆を漏らした。

「素晴らしいのぉ、社会的な意義もあるし、忘却水薬による副作用は些か問題視されておった、専門性が高く過去の実験記録もそう多くない為かなり難しい分野ではあるが、君ほどの生徒なら不可能な困難ではないのかもしれんの」
「ありがとうございます」
「幾つか、質問しても宜しいかな？」
「はい」
　漆塗りの万年筆を、くるくる、と念動術で空中に浮かべながら、組んだ手に顎を乗せ、何やら唸りながら言葉を選んでいる様であった。
　その間にも万年筆は当たり前のように、くるくると回っているが、その実、無言でずっと同じ早さ同じ回転で壁や机にぶつからないように部屋中を漂っていたので、この光景は、実は無駄に高度で無駄に洗練された念動術であった。
　リーゼは勿論、普通に無視した。本題と全く関係無いからである。
「……ふむ、では一つ」
「はい」
「まず、忘却水薬をどうやって調達しようと思っとるのかな？実験用の標本にしては中々のお値段ではあるんだが」
「はい、まず『特別課題研究投資資金』を中央魔法院研究管理部学生支援課に申請し、研究の経過報告と成果発表の義務を条件に資金調達しそこから捻出します」
「随分な大物を口説きに行くつもりじゃなぁ」
「必ず成功させます」
　ちょっとした茶目っ気に対し、ごくごく真面目に返されたので、スベった気分になってしまったが、そう言えば最近はチャールズにも似たような対応ばかりされ始めたので、いよいよ自分の威厳が崩れ始めている事に焦燥した。…訳ではなく、やっぱり呑気に話を進めた。
「頼もしい事この上ないのぉ…次、この研究の課題は何じゃと思う？自分の個人的な意見で構わんよ」
「…悪用の危険性でしょうか」
　ほんのちょっぴりとだけ、動揺した様な気がした。

常人なら、気のせいにして見逃す程の微かな、本当に微かな声と瞳のブレが、心に何かを落とした。
「……続けなさい」
今までどこか飄々としていたアリスの目が、一転して野生の虎を彷彿とさせる、剣呑な雰囲気に変わった。
しかし、それでもなお、凛としたままの声で応えた。
「この研究によって生み出される忘却水薬の肝は、従来とは違って覚えているが、覚えていないという二重思考である点です、つまり、例えばこの薬を痴情の縺れに利用すると『この人は人格に重大な欠陥がある為に理解も納得も出来ないが、この人を愛しているので許容する』という矛盾した思考になり、個人が持つ裁量権や自己決定権が混乱し、実質的な洗脳の術を受けた状態になる可能性があります」
「対策は何か考えているかな？」
「公務錬金術師資格以上の、厳しい取扱い免許試験の設置等の、強力で厳格な運用の制限条件が必須と考えております」
それから幾つか問答は続いて、厳しい目は少しだけ和らいだが、それでも不安の色は消えないままだった。
「…最後に、これは個人研究かな？」
「いえ、有志研究のつもりです」
「！…ほう、ほう」
「と言っても、私を含めた2人でやるつもりです」
ちなみに、彼女の本心としては偉大なる先輩（ルーシー）を含めた3人でやりたかったが、流石に今まで様々な野暮用を押しつけてしまっているだけでなく、ルーシーもまた個人研究を進める必要がある為、泣く泣く断念した。
「ちなみに誰とやるつもりなのかな？」
「ベアトリックス・セネルです」
ちょうど執務室の引き出しに、丁寧に整理されて入っていた書類の束から、セネルの成績表を取り出して、軽く目を通した。
「ふむ…君たちなら、研究室の開設を許可しても、悪い事にならないじゃろう、良かろう、研究を許可する」

少しばかり悩んだ後、更に引き出しから黄金の判子を取り出し、事前計画書にポンっ、と押すと、急に伸ばしていた背筋をだらけさせ、机に雪崩れた。
「全く……なんなんじゃ君は、もう少しガキみたいに舐めたモン持ってこないと、突っつけないじゃろ」
「はぁ…」
実際過去に、杜撰で見通しの甘い計画書を持ってきた生徒たちを鋭い指摘で論破し、中には泣き出してしまう女子生徒さえ居たが、とにかく一から十までハッキリさせないと気が済まない彼女にとっては、当たり前の常識であって、悔しかったり自分の未熟さを自覚して泣き出してしまうくらいなら、さっさと作り直してまた持ってこい、と厳しくも愛のある指導をしていた。そして、そんな厳しくて愛のある教職者の鑑である自分が大好きだったので（要はお説教して気持ちよくなるのが好きなだけ）、何も指摘する事がない今回の計画書と問答に次第に気が緩み始めた。
序盤の張り詰めた虎の目は、今や飼い猫の様に穏やかになっていた。
「この前の中間考査もなんか意味分からん点数取りおって……なんじゃ７７０点て、一応来期分の加点にしたけど、どうすりゃいいんじゃ前代未聞じゃぞ、あまりにも勉強し過ぎてて、大半の教員が引いておったぞ」
「日頃の努力の賜物かと」
「半端なく甲斐が無くてビビっちまうのぉ…なんかこう…もっと…チャーリー君くらいイジリ甲斐のある奴になれんのか？今から髪伸ばして三つ編みとかせんか？そんな典型的な不良少年の髪型、似合っては……いるが、もっとこう……のぉ？」
あろう事か堂々と、謎の文句（ついでに髪型も）すらブツブツと垂れ始めた。
が、もちろん、リーゼは眉一つ顰めなかった。
なんなら、それよりも変な所に引っかかっていた。
「…どなたですか？チャーリー君って？」

「一般魔術教養担当チャールズ・ハットルト君の渾名じゃ、ちなみにこう呼ぶと全然普通に怒るから面白いんじゃこれが」
「覚えておきます……改めて、今回はありがとうございました、失礼します」
一応ここで言及しておくが、アリスは見た目こそ化術によってうら若き少女の姿をしているのだが、御年７２歳である。
悪戯とタチの悪い揶揄いで、人の神経を巧いこと逆撫でて、それでいてなぜか憎めない不思議な人気者。
リーゼは何だか呆れてしまって、無性に帰りたくなり、深く頭を下げて自室に帰った。
扉が閉まった後、鼻目金を外した。
もうすっかり、冷徹な観察者の貌になっていて、椅子の下で密かにあの万年筆でそこいらの帳面に書き留めていた、リーゼが語った『悪用の危険性』を改めて見返して、今度はゆっくりと頭に叩き込んで、大きく溜息を吐いた後、無言で燃やした。

#12

ローズマリー・モーラ。3年生。愛称はマリー。
中間考査の順位は18位。
夜更けに寮を抜け出し、薄暗い夜道をしばらく歩いた。
最初は怖くて怖くて仕方なかった。こんな思いをするくらいなら、眠る様に楽に死にたいとすら思った。
が、最近はいよいよ慣れてしまった。
それでも夜道が怖くはあるので今でもなるべく早歩きではあるが、やっぱり遠いので、初めての時と同じく疾走する事はなくなった。
そうして、見慣れてしまったある酒場に着いた。
そこは不潔で、不衛生で、不道徳な雰囲気であって、女生徒が立ち寄るには不釣り合いな場所であったが、構わず扉を開けて、カウンタァの止まり木に腰掛けると、いつものように、幾らかの硬貨を渡しながら「水下さい」とだけ言って、そして懐から麻の布袋と本を取り出して、置いた。
店主は水を出した。布袋と本には特に触れなかった。
いつもと雰囲気が違ったので、軽く辺りを見回すと、店内の小さな舞台で、喜劇俳優が何やら冗句を言うようで、貧相で劣悪な客層は、しばし口を閉じ始めていて、一刻も早くここから抜け出したいマリーは、布袋と本をもう一度持ち上げてまた置いてみたが、やっぱりさっぱり誰も反応しなかった。
店主も、舞台の方に目線を向けていた。
「ここらで鉄板冗句をお一つ。ある男が療院を訪ねて、こう訴えた。『私の半生は悲惨の一言だ。もう人生になんの希望も持てないんだ。世間だってひどいものだ。先の見えない不安定な社会を、たった一人で生き抜く辛さがわかりますか?』医者はこう答えた。『簡単なことですよ。今夜、あの有名な道化師、パリアッチの興行がありますから、行ってきなさい。笑えば気分もよくなりますよ』突然、男は泣き崩れた。そして、こう言ったのさ」
ふと、オチが気になった。

「『先生…私がパリアッチなんです』…ってね」
下品なせせら笑いで場は満たされて、空き缶や空き瓶が四方八方から飛んだ。ごちゃごちゃとした野次の中には、何故か「死ね！」と叫んでいる輩すら居る。びっくりしたので、その輩を横目で見ると、焦点のあっていない目で、虚空を掻きながら、ブツブツと何かを言いながら、酒を口の端から溢しながら、笑い泣きしていた。
マリーはうんざりした。
肝心の喜劇俳優はそんな状況下でも態とらしい笑みを貼り付けて、何がしたいのか、飛んだり、跳ねたりして、時には投げつけられた空き瓶を掴んではそこいらに投げ返したり、曲芸としての小道具にしたりしていて、さっきまでの巧みで芝居がかった咄家とは思えない、猥褻だったり意味不明な言葉を叫びながら、しばらく舞台に留まった後、さっさと捌けた。
もしかしたら、この冗句を真面目に聴いていたのは自分だけかも知れないという錯覚と共に、契約の関係上とはいえこんな所に足を運んでいる自分がひどく惨めで情けなくなって、なんだかむしゃくしゃとして、モノでも投げつけてやろうか、と思った。
実を言う所、喜劇俳優が出し物にしていたそれは、何度も使い古された冗句であった。マリーもオチを聞いて、そういえば結構昔に食卓で父親がちょっとした小咄として話していた事を思い出した。
が、場の下品な雰囲気に充てられたのか、それとも初めて生で喜劇俳優が軽く演じながら話していたのを見たせいか、妙に新鮮で面白いと感じたので、この変わり果てた生活に少しだけ希望を見出し始めた。
そこに、床掃除を雑用の半亜人に命じた店主が、急に話しかけてきた。
「嬢ちゃん、麦酒、呑むか？」
「…私、未成年ですけど」
なるべく毅然とした態度で断ったつもりだったが、店主は動ずる事なく飄々としている。
「知るかよ、ここには血売り尻売り精液売りまで酒飲んでる屑の掃き

溜めだ、ガキが酒飲んでるのなんか誰も興味ねぇ」
「はぁ？」
「いいか？お前はどうせ馬鹿だからここに嫌々来てるんだろう？事情なんかは知らねぇが、たぶん騙されたり脅されたりして、なんか汚いコトやってるかやらされてるんだろ？こっちも薄々勘づいてるんだ、だがな、それでもここに来てる以上は客なんだよお前も…白けた面でボッタクリ価格の水をチビチビ飲んでんのは構わねぇが、どうせお前も終わりの人なんだ……どうせ終わりなら、辛気臭い面でも酒呑んで騒いでも一緒なのさ」
「……麦酒の方が単価が高いからでしょ」
「…で、呑むか？」
「…うん」
「まいど」
置いておいた布袋は、いつの間にか消えていたが、気づく事なく朝方に帰った。
この2ヶ月後、彼女は自主退学した。
その頃にはもう契約期間は切れていたが、それでもここに足を運んでいたという。

◆

学院内の図書館に或る本が、こっそりと増えた。
題名は、『オウェル王国における亜人及び半亜人貧民の子女が、その両親ならびに国家にとっての重荷となることを防止し、かつ社会に対して有用ならしめんとする方法についての私案』。
著者は書いていない。出版社名もだ。
だが、いつの間にか、図書館に置いてあった。
不思議な事に色々な棚に置いてあった。
司書に見せてみると、不思議そうな顔をして記録簿を漁るが、中途半端な記録ばかりで、やっぱり著者や出版社には繋がらなかった。
学院側はこの問題を重く受け止めた。

教員の中には軽く考える者や、なんなら内容に感銘を受けていた者さえ居たが、それでも厳重で厳格な対応を取った。

なぜならば、その内容が問題だったからである。

それは亜人及び半亜人貧民が数多くの子供を抱えて飢えるオウェル王国の窮状を見かねて、経済的な救済をもたらすと同時に人口抑制にも役立つ解決策の提案であった。

その提案とは、亜人及び半亜人貧民の赤子を1歳になるまで養育し、純人の富裕層に美味な食料として提供することである。

肉として販売すべき子供のおよその人数や食肉に適した年齢になるまでの養育費、販売価格、食肉の消費量予測などをも、具体的な数値を交えて詳細に見積もり、予測される様々な利点や社会的効果を列挙した上で、さらに料理の簡単な調理法や屍体の皮革の利用法についても言及している。その予測される波及効果は、魔術的な発展にも及ぶとされており、子供の肉体を隅から隅まで利用する事で、素材不足による研究の停滞が緩和されると共に、霊薬の治験による事故の回避とより精密な記録の採取など、主に療院の発展に大きく貢献する事ができる旨が書かれていた。

さらに、著者の見積もりによれば、生まれたばかりの赤子は母乳と残飯によって充分に育てることができ、1歳まで養育する経費は非常に格安と見られる。また健康な幼児の肉は極めて美味とされていることから、富裕層の美食の宴席に供することもできる。この方策によって貧民は所得を得ることができ、子供が間引かれるので養育費の重い負担もなくなる。食われる当の赤子も、堕胎や口減らしのための嬰児殺害の犠牲とならずにすみ、またどのみち生涯全体にわたり貧困や飢餓によって不幸な人生を送るのであるから、たとえ食われるためであっても1歳まで充分な養育を受けるので幸福であろう。国家にとっては貧民対策の負担という損失がなくなり、国家予算の増大が見込まれる。

残忍で、冷酷で、諷刺や皮肉の冗句の様な発想で、それにしてはあまりにも現実的で経済的で算術的で効率的であって、図表には最近に両議員会議内で発表された様々な統計が纏めてあって、まるで学術的

な論文であった。
学院内の上層部と教育理事会は戦慄した。
この残酷な本は、人の正義を狂わすと感じた。
もし、仮に、この本に感銘を受け、民衆を扇動する先導者(カリスマ)が現れてしまえば、たちまちに人々は正義という名の暴力を、救済という名の虐殺を、自信満々に、如何にも『私たちが正しいのです』といった面で、貧民窟にぶつけるのだろう。
皆、思った。
私たちは自由なのだ、と。どんな思想を持っていたとしても、思想によって齎される行動が結界による魔法に反していなければ、尊重されるべき思想なのだ、と。
だが。
だがこれは、異常な程の結束主義(ファシズム)で、人種主義(レイシズム)で、人間至上主義(ユマニズム)だ。
理事会の中には、これに『純人社会主義』と名づける者も居た。
故に、割けるだけの人員と予算で対応した。
大広間での学年集会が行われた。
全ての教室で緊急的に持ち物検査が行われた。
著者と出版社に訴訟するために、学院内だけでなくあらゆる場所に行き、手掛かりを探した。
学会に出入りする思想的に問題のある学者や、外で出歩いていた普段の素行が悪い生徒にすら探りを入れた。
それでも、見つからなかった。
せめてこれを焚書し、規制しようと動き出した頃には、その本はどの棚からも、煙の様に消えてしまっていた。
理事会と教職員たちのほとんどは、怒りすら沸かずに、ただただ怯えていた。
計画的な犯行だ。それも我々を出し抜く程の。
少なくともただの悪戯では無い。
犯人の全貌や手掛かりさえ見えない。
何かが起きようとしている、と。
ただ、アリス・モンタギューだけは、万年筆をくるくると浮かせな

がら、貧乏ゆすりしながら、碌に進まない会議を眺めていた。
彼女だけが、確信している。
その本は、外に流れた。
いつの間にか、外に流れた。
それは、劇物であって、思想の狂化を促す異物だ。
それはもしかしたら、市立図書館の論文保管棚に最近の論文として、或いは本屋の最新の商品として、或いは誰かの書斎に新たに入った本として、いつの間にか、いつの間にか、人々の中にゆっくりと、混じり入っていく可能性があるのだ。
それが、外に流れた。
社会という思想や主義や主張の混沌に。
ふと、会議に参加した全ての人が、アリス・モンタギューを見て驚愕した。
彼女が初めてその化術を解いたのだ。
勿論老婆だった。皺と渇いた肌は枯れ木そのものだ。白髪が禿げてきている。
しかし、最も驚いた点はそこでは無かった。
いつも飄々としたその顔が義憤の炎で真っ赤になって、その気迫によって、皆彼女の顔がまるで陽炎の向こうにあるように、歪んで見えた。

#13

『奇数日会』。それは社交界（サロン）である。
５０年程前からハンプティ・ダンプティ邸で催されるようになったそれは、毎月どこかの奇数日に不定期で集まり、様々な議題を話し合う場だ。招待された面子の中には学者や学生だけでなく医療従事者や芸術家、実業家、銀行家、民院議員や師院（二院制の内の一つ）議員の姿もあり、夕方の食卓で美食や美酒を楽しんだ後に、深夜まで談話室で各々議論し合うのだ。
その場にリーゼ・ポンパドール＝ダックテイルとベアトリックス・セネルは、ハンプティ・ダンプティ８世に招待された。
或る机では、『日出国の河童（カッパ）なる亜人種によって独自に発展した文明について』の議論が交わされていた。
或る机では、『マンドラゴラの抽出液による副作用の無い嗜好品の研究開発についての是非』。
或る机では、『かの有名な小説家アーサー・ヘイスティングスによる新書、「今宵も月が哭いている」の読書感想会』
或る机では、『蒸気機関の開発と発展による魔力性資源を原動力とする機械的仕事の代替法』。
或る机では、『メイフラワ合州国による独立宣言に対する国際魔法連盟の対応について』。
或る机では、『人工的に錬成された代理的中枢神経の移植による白痴及び精神分裂症の治療法について』。
どれも知的で洗練された最先端の話題であって、参加する者は皆、教養に富んだ富裕層や中流階級ばかりであった。
そして、或る一つの長机に人が集っている。
中央には、夜会服の上に革の外套を羽織った女生徒が足を組んで煙草を喫んでいて、その隣には小綺麗な礼服を着た同じく女生徒が、そわそわとしながら行儀良く座っていた。
そして、彼女たちを囲う様に、礼服を着た少年少女や、白衣を着た青年や、洒落た礼服の中年や、背広を着た壮年が、葡萄酒の杯を片手

に煙草や葉巻を喫んでいて、そこいら一帯はやや煙たくなっていた。
　白衣の青年が口を開く。
「君の研究は、ウチの部署でも話題になっていたよ、『深刻な心的外傷治療の為の忘却水薬の一部改良による二重思考療法』、大変興味深い内容だったよ」
「ありがとうございます」
「おっと、忘れてた忘れてた、はいこれ名刺」
「どうも、…おや、魔術癒師さんなんですね」
「まぁね」
　そうして、彼女は『繋がりを産む種』を衣嚢に仕舞い込んだ。
　それを合図に、議論は開始された。
「従来の通り宣言的記憶（エピソード）そのものに干渉するのではなく、手続き記憶の一部である『観念』に干渉するのは、中々大胆な発想だ……だが…」
　そこで、白衣の青年は少し態とらしく口を噤むが、目線で促されたので、続ける事にした。
「中央魔法院での面接試験でも答えていたが、何度考えてみても、やはり『観念干渉』は悪用の危険性が非常に高いと思うのだ、私が考えられる最悪の結末は、君のその楽観的な予想を超えていると確信している、故に、此れについて君と議論したい」
「なるほど」
「なぁに、今後、君の研究が成功すると云う確信があるから、私はこうも慎重になっているのだ、何もケチをつけて君の熱意を削ごうという訳ではないよ」
　飽くまで友好的で温和に議論を持ち掛けるが、彼女の観察眼は密かにその目の奥に確かな『侮り』を感じたらしく、相手にバレないくらいに眉を顰めたが、此方も飽くまで丁寧な口調で冷静に議論に乗った。
「では、まずその最悪の結末についてお聞かせ願えないでしょうか？」
「うーむ、その前に、君は…最近話題の所謂『有用なる私案』について、知っているかな？」

「はい、この前本屋の新書棚で見たことがあります、あの正式名称がやたら長ったらしい題名の論文でしょう？」
「あれがまさしく私が危惧する『最悪の結末』の鍵なのだよ」
彼は煙草を灰皿に押し付けて、葡萄酒を一口呑むと、咳払い一つ。
そこから立ち上がり、途端に弁舌に熱が入った。
「まず君の研究についての議論の前に、この私案自体の『利点と欠点の天秤』から整理しよう、後に必要となるからね」
お誂え向きに車輪付きの小さな黒板があったので、長机に座る者たちが全員見えやすい位置まで移動させた後、白墨でつらつらと利点の欄と欠点の欄が書かれた。
利点その１
医療の発展による人的資源の延命。
利点その２
食品産業や服飾産業の雇用の創出。
利点その３
国家予算の増大。
利点その４
新たな食文化の創出。
利点その５
貧困を原因とする犯罪の減少。
欠点その１
亜人及び半亜人及び亜人公民運動家からの著しい反発。
欠点その２
かつて鎮圧された反社会的組織『亜人解放戦線』の再熱の可能性。
欠点その３
『亜人解放戦線』の拡大による治安の悪化の可能性及び暴動の可能性。
欠点その４
国民の道徳的、倫理的な辟易。
黒板の文字は達筆で、誰もがそれだけでこの青年の素養に関心を抱いた。
「こうして見るに、我々純人とそれによって構成される組織や団体か

ら見れば、一時の道徳や倫理の放棄によって、多くの利点が手に入るのだ、勿論暴動の可能性は多いにあるが、殆どの亜人や半亜人は魔術の素養がない労働者階級であるから、鎮圧出来る可能性は高い」
「だが暴動に対する嫌悪感が強い穏健派の政治家や亜人公民運動家たちは違う、大概が魔術師で高い教養を持っているし、暴力的でない方法で抵抗するだろう」
　まだまだ続くその口は、他ならぬ議論相手の女生徒によって遮られた。
「なるほど、だがこの『二重思考療法』を悪用して政治家全体に波及させれば、亜人たちだけでなく穏健派の政治家や運動家たちの政治的な『観念』に干渉される事でそもそも暴動が起こらず、鎮圧の為の国家予算と人員の犠牲という代償を払わなくて済む、ということか」
　結論を先に出されたので、彼は少しばかり不機嫌になってしまったが、同時に感心したように頷いた。
「…ふむ、私はこの本を読んだことは無いが、確かに今聞く限り、これの私の研究と合わされば、国家という機関が国民の自由意志すら制御し得る強力な権能になってしまうな」
「しかも、それだけではない」
　男はあまりに熱が入ってきたので、とうとう白衣を脱いだ。
「もしこれによって亜人以外の国民の『観念』が統一されれば、我々は国民共同体となり、全ての思想が統一される事で、憲法が保障した思想や思考の自由が、実質的に廃れてしまうのだ」
「全ての人間が一つの大きな意志の根塊に従属する、ということか」
「私はこれでも自由主義者で資本主義者で競争主義者だ、正直そんな事になってしまえば、私は自殺するだろうさ」
「そうですか？私はある意味では理想の国家が出来上がる気がするのですが」
「ほう……うーむ、ここからは互いに妥協できぬ信念（イデオロギー）の闘いになるな、では第三者に聞いてみよう、セネル君、君もこの研究に参加するそうだが、君自身の意見が聞きたい、生憎面接試験は代表者のみしか出席しない決まりだからね、私は君とも話してみたかったのだ」

「えっ！…リゼさんじゃなくて、わ、私ですか？」
　唐突に話を振られたベアトリックス・セネルは狼狽したが、軽く思案した後、ゆっくりと、辿々しくも、しっかりと意見を述べた。
「私は、この私案が実際に施行される事には反対です、そして『二重思考療法』は、更なる慎重さを以って厳重に管理する必要があると思います」
「ほう、その心は？」
「先ずこの私案についてですが、やはり亜人の肉を食べるのは食人嗜好（カニバリズム）であると思うので、道徳的な規範を逸脱すると思います、それに、私は例え異なる文化を持つ人種であったとしても、出来る限り尊重し合い共存し、弾圧や差別は断じて慎むべきだと思います」
「青い程の理想論だが、悪くない」
「私もそう思います」
　何故かリーゼも同調した。
　調子が狂いそうになったが、耐えた。
「そして『二重思考療法』ですが、確かに悪用された際の危険性は非常に高いですが、それでも被害者の精神が回復し、咎人が正しく魔法の下で裁かれるのなら、いっそ全てを捨ててしまうよりも、正しく扱う方法を皆で考えたら方がいいと思いました」
「国民の全員が君であればねぇ…」
「私もそう思います」
　セネルの声と言葉と態度には、どうやら論客の荒立つ心を宥め、和ませる効果があった。

◆

　その後も何度か議論を交わした論客の両者は、結論こそ平行線であったが、互いの教養を認め合い、「これもまた得難い見聞であった」、と言いながら握手を交わした。
　白衣の青年だけでなく、様々な論客とも議論を重ね、丁度、午後12時に長針と短針が重なる頃、今日の『奇数日会』はお開きとなった。

帰り道、リーゼは衣嚢に入った論戦の際に貰った相手の名刺を眺めながら、手帳に全員の名前と職業を書いた。
すると突然、話しかけられた。
「あの～研究を本格的に始める前にさ、良かったら喫茶店でお茶しない？今週末とかに」
「奢らないぞ」
「いや、別にそんな期待をしていた訳じゃ」
思いっきり真に受けている様子を見て、慌てて訂正による弁明をしようとしたが、
「いや、冗句だ……冗句でも無いな、うん」
やっぱり気まずそうに自己完結した。
セネルは今日で初めて、上半期を共に過ごした友人の唯一の弱点を見つけた。
「ちょっと、意外だね」
「私は表情が硬いらしいから、たまに冗句を言うのだが、大体上手くいかないんだ、今日の『奇数日会』でも、私と話す奴は皆ほぼ鉄面皮だったしな、あーあ、スベりたくないのにな、恥ずかしい」
「だったら、私のちょっと恥ずかしい趣味を教えてあげる」
悪戯っぽく微笑んで、少し背伸びをして端正だがまだ子どもっぽい顔を耳元に近づけた。
すると、途端に何かを閃いた顔をした。
「あっ…やっぱ喫茶店で言うことにする、まだ「絶対行く」って言ってないし」
「絶対行く」
「返事が早い」
あまりに早い返答に驚いたんでギョッとしてしまったが、それだけ自分の趣味に関心があるのだ、と彼女は思ったので、何だか嬉しくなった。
今度はリーゼから話を切り出した。
「そういえば、そもそも何で私にそんな恥ずかしい趣味ってやらを告白するんだ？」

「だって、リゼだけ恥ずかしい思いするのは公平（フェア）じゃないと思って」
そう、はにかむ姿を見て、リーゼは彼女との間に熱い友情を感じた。
それからの帰り道は殆ど無言だったが、居心地は良かった。

#14

ガーヴェニー区13丁目7番通りの路地裏を更に進んだその先には、ドブ川と、廃工場の跡地。
廃材、端材があちこちに投げ捨てられていて、コンクリイトで出来た屋根には穴が空いていて、壁も柱も所々崩れている。
誰もが見捨てた工場の跡は、未だこの地に縛り付けられたままであった。
そして現在、凄惨な有様になっていた。
そこには、艶の無いガサガサの長髪をした少女が1人、倒れ伏す半亜人の少年が2人、しゃがみ込んだ少年が1人、座り込む服を破かれた少女が1人。
5人の少年少女が居た。
倒れ伏す少年たちの顔には、酷い熱傷があって、焼け爛れていて、口から泡を吐きながら、倒れ伏しながらジタバタとしていて、羽根を捩がれた羽虫が如く、ただ地べたに転がっていた。
しゃがみ込んだ少年と、あられもない姿の少女は、息を荒くしたまま、目の前の長髪の少女に怯えていた。
「西ガーヴェニー幼年亜人学校5年生、半豚鬼(オーク)のギョーム君、半小鬼(ゴブリン)のフィリップ君、聞こえとるか？」
長髪の少女が、倒れ伏す彼らに一声かけてから、痛ぶった。
熱傷で覆われた顔を、痛ぶった。
羽根の無い虫を痛ぶった。
具体的に説明すると、そこらの硝子の破片で太腿や背中を滅多刺しにした。あえて魔術を行使せずに、だ。
「…はぁ…はぁ……」
ギョームとフィリップは、微かに息をしているが、次第に脈は弱く薄くなってきているので、長髪の少女は、懐から試験管に入った何かしらの水薬(ポーション)を取り出して、そのまま彼らの顔面に雑にぶち撒けた。
「おっと、勝手に逝きかけんな半亜人(バスタード)共、コッチは興奮してきたばっかなんやぞ」

水薬によって、その熱傷と裂傷は瞬く間に蟹足腫(ケロイド)に変容した。恐らく、強制的に肉体の治癒を促進させたからであろうか。
それを、見たまんまに喩えるのなら、肉塊であった。
彼らの顔はまるで、醜く蠢く肉塊であった。
「ど……どうして…こんな…？」
「意外な質問やね、北ガーヴェニー区幼年学校5年生、コリー君」
「……ぼ、ぼくの……な、まえ…」
「ビビらんでええんやでぇ、ルーシー姉ちゃんは君と、君のお友達の味方なんやからなぁ」
ルーシーと名乗った少女は、そう言って微笑みを浮かべてみせるも、やっぱりどうしても不気味だった。
何故なら、長髪の少女のその顔は、クッキリとした隈があって、瞳は虚で闇夜を彷彿とさせる程真っ黒で、頬骨がハッキリしていて、窶れていて、肌には水気もハリも艶も無かったからである。
それから、ギョロリとした目が横に泳ぐと、徐に、ルーシーは紅色の雨具外套(レエン・コオト)を、怯え続けるままの少女に羽織らせてあげた。
「君、寒そうやね、先に帰りな」
「え…あっ……えっ…」
少女は、バレバレの目配せをした。
「ん？コリー君なら後で、ちゃんと姉ちゃんが家まで帰したる」
「…コ…ッ…コーちゃんに、な、な、なにかを、何かをする、するん、……ですか？」
その少女は立った。その足で自ら立った。
声は震えていた。脚もみっともなく震えていた。
それでも少女は立った、他ならぬコリーという少年の為に立ち上がった。
「だからビビらんでええって、ただちょーっとお話しするだけやって」
「…アリー、帰って」
それは唐突な、震えを押し殺した少年の声だった。
「……っ…」
「先に帰って、身体を拭いて、ご飯食べるんだ……ぼくも、すぐ後で帰

るから…ね？お姉さん」
怯えながらも気丈に振る舞う目を見た。
故に。
パチパチパチパチ。
拍手が木霊した。閑散とした場に木霊した。
この場に似合わない、拍手の音が奏でられた。
「感動した！コリー君、ええやん、ウチ、君みたいな子、好きよ」
「大丈夫だから……お願い、アーちゃん、帰って」
「……う、うん」
アリーと呼ばれた少女は、踵を返して、何度も何度も振り返りながら、その場を去った。
ルーシーは、コリーを雨が当たらない所に、火炎術の紋章手巾と共に置いた。
手巾は忽ち燃え上がって、焚火の役割を担い、雨粒で冷えた身体を温めてくれた。
お礼を言おうと火から目線を外すと、もう既に少し離れていて、半亜人の少年たちの喉仏や鳩尾や睾丸を何度も何度も蹴りまくっていた。
「死ね！ボケ！カス！クソ！テメェら！みてぇな！社会の！屑の！労働歯車未満の！タンカス野郎共が！のうのうと！生きとんちゃうぞ！死ね！はよ死ね！人間に！楯突こうなんざ！このっ！このっ！犯罪者が！悪党が！チンピラ！ゴロツキ！ゴミが！くたばれコラッ！…はぁーっ……はぁーっ……畜生！鬼畜生がよ！はよ死ね！はよ死ね！」
そう、執拗に蹴りまくっていた。蹴りまくって息切れすれば、一度息を整えてから、また蹴りまくった。そうやって力いっぱいに蹴ったことで剥き出しになった歯は、かなり黄ばんでいて、汚かった。
「テメェらのその、しこたま人間様の女子供犯してすっきりしてきた腐れ睾丸面、すっかり蟹足腫でぶくぶくになって、むっちゃオモロいで、性病患者みてぇでなぁ…こりゃ爆笑もんですわ、ふひっひひひ……はぁ、以上、君が盗んで脅して犯して嬲ってきた者たちの代弁

者でした、ほな、さいなら」
　嘲る私刑人の暴虐の嵐は、悪意と殺意に満ち満ちていて、偏執的で猟奇的な狂気ですらあって、それでも、何故かその奥の奥に悲しみだとか、虚しさのような、どこか空っぽで無感情な情感を、側から見て感じ取った。
　勿論、それを口に出さなかった。
　口に出せなかった、という方が正しいのかもしれないが。
「お、お姉さん…」
「激しく、すっきり」
　そう言って唾を蟹足腫だらけの顔に吐きかけた後、そこいらの廃材に腰掛けて、また懐から、今度は試験管を取り出して、トドメとばかりに彼らに向かって投げつけると、硝子が割れて、水薬が漏れ出て、当てられた部分は徐々に壊疽が広がっていった。辺りには腐臭が漂い、蠢きから生まれる擦る音も相まって、気色の悪い悪魔みたいであった。
「っ……」
　息を呑むコリーをどこか微笑ましそうに見つめた後、煙草を取り出して、火をつけて、顎に手を乗せて、喋り始めた。
「ちなみに、ウチは間に合ったんか？」
　彼は一瞬その意味が分からなかったが、直ぐに合点がいった。
「…はい、ぼくはちょっと殴られましたけど、アーちゃ…アリーは…ただ服を破られただけです…」
「おぉ、良かった良かった」
　紫煙を喫みながら、ケラケラとしているその姿は、どこか浮世離れしている。
　コリーは、その真っ黒な視線で続きを促されたので、事のあらましを話した。
　２歳の頃、両親を亡くした事。
　物心ついた頃から小さな孤児院で暮らしていた事。
　アリーとは、そこで共に育った幼馴染である事。
　６歳になって、同じ幼年学校に通うようになった事。

２人共、幼年学校の寮に上手く馴染めず、いつも一緒だった事。
たまたま近所の路地裏で見かけた野良猫を、彼女と共に世話した事。
急に野良猫が行方不明になった事。
捜索のために無謀にも、遠出をしてしまった事。
そして、路地裏の奥へ奥へと迷い込んでしまった事。
吸い殻が２、３本程、床に落ちる頃、とっくに生き絶えていた半亜人の少年たちは、その肉体がグズグズになって、雨に流され始め、地面の土に食い込んで、染み込んで、直に消えてしまいそうだった。
コリーは初めて死体を、そして無情にも溶けていく凄惨な有様を目にしたが、意外にも恐怖だとか、焦燥だとか、逆に爽快感だとかは感じなかった。
「大衆浴場、行くか？」
またも唐突に、今度はさっきとは打って変わって穏やかな口調で、なんなら頭を撫でながら、そう問いかけられた。
「えっ…」
「お姉ちゃんの奢りやで」
目の前の女は、確かに殺人者だ。
倒れ伏す半亜人の少年たちを滅多刺しにして、蹴りまくった。
だが、今はどうだ。
目の奥には確かな優しさを感じた。
だからこそ、少年の頭と心は混乱した。
「……行きます」
ただ、温まりたかった。
火だけじゃ、まだ寒かった。
それだけの理由で、彼女に付いて行く事にした。
そのしばらく数日後、コリーは自主退学した。
そして、消息不明になった。
アリーは、幼馴染をいつの間にか失った。
探しに行きたかったが、彼女にはもう、路地裏にもう一度足を踏み入れる勇気がなかった。

◆

正午。喫茶店。店名『ポポレ』

店内の蓄音機のレコォドからは、耳心地良い音楽が流れ、木目の机や椅子はどこか温かみを感じさせる。

そして、紅茶に砂糖と牛乳を入れる女生徒、ベディと、珈琲を飲みながら煙草を喫む女生徒、リーゼ。

二人は、それはそれは楽しそうにおしゃべりしていた。

「それでね、それでね、お母様ったら私が書いた詩を見て、『貴女は将来凄い詩人になれるわね』って舞い上がっちゃってね、それがとにかく恥ずかしくって」

「いいお母様じゃないか、それに、君のその秘密の詩ってやら、うん、やっぱり良い出来だよ、名作ってやつだ」

彼女の秘密の趣味である詩について話してからは、いつもより饒舌に他愛無い話を喋り倒すベディに、リーゼはただ微笑むだけであった。

雑談がひと段落して、しばらく音楽に耳を傾けたり、窓から見える木漏れ日をぼんやりと眺めていると、不意にリーゼが口を開いた。

「なぁ、ベディは将来、何になりたいんだ?…やっぱり、詩人か?」

「うーん、迷ってるの、詩人になりたいけれど、やっぱり療術師さんにもなりたいし…」

「…詩なら、働きながらでもどこかの雑誌に寄稿したり、誰かと同人雑誌なんてやれるんじゃないか?」

「私、一点集中型だから、両立なんてできないよ」

自信なさげに俯いた頬に、冷たい、ゴツゴツとした、無骨な手が添えられた。

身を乗り出して、柔らかな顔を少しばかり強引に引き上げて、じっくりと目を合わせられたので、なんだか胸が熱くなっていると、いつもよりも、熱の入った、淡白で無い声色で、こう言った。

「いいか?…夢を見るんだ、それが一番人生で大事な事だ、その夢って

のは別に幾つあっても良い、もっとがむしゃらに何でもかんでもやってみていいと思うよ」
「…そうかな」
「君は勤勉だし、真面目だし、素晴らしい娘じゃないか、君が頑張るなら、私も力になりたい」
「あ…っ…ふ、ふふ…ありがとう…っ」
少しだけ涙を溜めて、やっぱり照れ臭くなって、それでもちゃんと笑って、感謝を告げた。
ベディは、気がつけばもうすっかり、リーゼに夢中になっていた。
彼女は強く、正しく、優しく、故に人を導く力があると信じた。
否、心酔した。
つまり、もう戻っては来れない段階であった。
「…ええっと……そ、そういえば！リーゼは将来の進路とか！考えてるの!?」
「相変わらず話題を変えるのがヘタだな、…まぁ考えているさ」
「教えて教えて！」
「主相」
ベディは、ぽかーん、としてしまった。
そのちょっと間抜けな表情がツボに入ってしまったのか、リーゼは咽せた。更にそれは丁度煙草を吸っていた時だったので、何度も咳き込んでは、煙が目に染みて、少しだけ涙目になっていた。
「だ、大丈夫!?」
「あははっ！何だよその顔！…っく…くくっ……ズルいってそんなの…っくく…っはははは…！あー、久しぶりに本気で笑ったな…っくく」
「そ、そんなにヘンテコな顔してた？」
「してた、ぽかーんってしてた、かなり可愛かった…っくくく…」
この時、初めて心の底から、腹を抱えて笑っている姿を見た時、胸の中に、多幸感と高揚感が溢れていた。
自分が心酔している友が、恐らく自分だけに、こんな姿を見せている、という事実による幸福感が、恥を僅かに上回った。
「…オホン！それ以上淑女に恥をかかせないでくださいまし！」

「…オホン！おおう、こりゃあ失礼しました」
ふざけて芝居がかってみると、思ったよりも景気の良い返事が帰ってきた。
これもまた、自分だけに見せる側面かと思うと、またも、嬉しくなった。
「ちなみに、もし主相になったら、オウェル王国じゃ、たぶん歴代で唯一の女性主相なんじゃない？」
「悔しいが15年前に先を越された、つまり2番目だな」
「でも、もしなれたらそれでも凄いよ！ねぇねぇ、何で主相になりたいの？」
気軽な問いかけに対し、一見、おちゃらける様に、しかし、目の奥にはギラギラとした決意と意志を滾らせて、こう答えた。
「この国を救いたいからさ」
そう言って、不敵な笑みのまま、とっくに冷めた珈琲を啜った。

猟奇的で暴力的で狂気的な本能の残滓によって発生した、とある少女の無意識内の二重思考的な混沌なる異常思考

悪夢だ。これは悪夢だ。
股ぐらから血が流れている。真っ赤な血が流れている。
何度も何度も股に手を突っ込んで、掻き出してみても、血は流れるばかりで、むしろ、どんどんと血は流れて、流れて、流れて、流れて。
横目には、精悍な顔つきの筋肉質な男がいる。全裸の男が立っている。
俺の両手を片手で掴んで、拘束して、そのまま接吻してきた。
口内を蹂躙するそれは、大きな大きな芋虫みたいで、てらてらとして、ねばねばとして、つるつるとして、それが！それが!!俺を！俺の中を！
気持ちが悪い！気持ちが悪い！気持ちが悪い!!
ビクともしない。俺の両手はビクともしない！
男は嗤っている。女に欲情した目だ。発情期の獣だ。罪人の瞳だ！
分かっている。ああ、分かっているとも。
これは『俺』だ。かつての『俺』だ。
俺なんだ、男に生まれて、男として育って、男の肉体を生きた俺だ。
俺は、女の身体なんてロクに分かっちゃいなかった。
だから、こんな、醜い、気持ちが悪い、身勝手で、傲慢で、気色の悪い、我儘な、傲慢な、薄汚い欲望を、抱えて、抱えて、ずっとずっと内に秘めて秘めて秘めて、時には綺麗に飾ってみて、時には欲望を昇華しようとして、時には相手を尊重し慮る心意気を学んで、こういった、欲望を、肉欲を、消そうとした。
だが、消えなかった。
俺はきっと若くして死んだのだ。
男としての生涯を送って、肉体が生み出す本能的な欲望を消化した

り昇華したりせずに、死んだのだ。
故に、これは残った。この若くて、青くて、未熟な願望が。
そして、この醜い、蟲みたいな、獣みたいな、欲望の残滓が残った。
躁鬱のように、荒れ狂う本能と理性の矛盾、つまりは二重思考が、俺の魂にこびりついて、異なる魂に異なる肉体の、歪な、それはそれは歪な『人のような、なにか』ができて、作り上げたか、或いは作り上げられた。
許すことなど、できない。
俺は、何かをただ只管に、がむしゃらに、遮二無二、犯して、征服して、屈服させて、支配して、勝利するという欲望の因果に縛られて、取り憑かれて、そうして、俺は俺に犯される悪夢を見る。
見よ！この血走った目を！
悪魔だ。俺はまるで悪魔なのだ！
これを抱えたまま死んだ！俺はきっと死んだのだ！そうしてその悪魔は飛び立って魂にしがみついて、夢にまで出てきやがった。
畜生が。
俺は、俺は、俺は、覚えている限りでは、童貞だった筈だ。
怖かったのだ、女が怖かった。
姉が怖かったのだ。母が怖かったのだ。女友だちが怖かったのだ。元恋人が怖かったのだ。
それと同時に、父を、親友を、悪友を、旧友を、そしてなによりも俺自身を見下していたのだ。
男は馬鹿で愚かだと、信じていた。
故に、女という性別が怖かったのだ。
嗚呼、分かっているとも。
理性はとっくに分かっているとも。
男だの女だの中性だの無性だの、そんなものは恐怖の差別の異物の崇拝の畏怖の尊敬の愛情の友情の対象を本質的に決定するものではない。
分かっている!!
そんなことは、分かっている！これを否定するのは、社会に背を向

けることだとも、分かっている！分かっているとも！
だが、それならば、今の俺はなんだ！下らない事か！これが！この痛みと苦しみと恐怖は、下らない事なのか!?大袈裟だとでも言うのか!?
なんだ、この悪夢は、許せない。
許してはならない。
殴り書きのような思考で、かつての俺は、文字と声とでグシャグシャになって、それで、消えて、また、今度は、俺はかつての俺になって、目の前には、男になろうとしている今の俺が出てきて、俺を睨みつける。
抵抗するように、戦う姿勢が見える。
そうだとも、これは、きっと無意識下の自己嫌悪だ。
そうやって、憎しみが自らの内界で、ぐるぐると輪廻していて、終わりのない、躁鬱のようで、きっと、終わりがない。
思い出した。
俺の原初の恐怖。
母だ。
物心ついた頃から、姉はヤンチャで、よく母に叱られていた。
幼い頃から共感能力が高かった俺は、その、叱咤が俺にまで飛んでくる事が怖くて怖くて仕方なかった。
しょうがないだろう、幼い頃の人間にとって、大抵は、親が全てなのだ。
わかるとも、ああ、わかるとも、昔の俺の声を出すな、耳に障る。
そうだとも、これはきっと、愛着的な意味では無い、偏執的な猜疑心だとかの方面のマザー・コンプレックスなのだろう。
母は、良い母親をしていた。
虐待も飯抜きもされなかった。外に放り出されなかった。
ただ、それでも、幼い時分の共感は、側から見れば、そのヒステリックな叱咤がなによりも、世界の崩壊のようで怖かったのだ。
もっとあるとも、そう、あるとも。
姉は、ゲームばかりしていて、よく叱られていたが、それでも何度

も反抗した。
弟である俺をよく見下して、それを母親や、時には父親にすら嗜められ、叱られ、制された。
それが怖かった。
俺は別に直接叱られたことは少ない。
もう、物心ついた頃から周りの目を気にして模範的である事だけを心がけて、心掛けて、とにかく、良い子であろうとした。
だが、どうだ、俺よりも何度も叱られている姉は、ある意味では、両親に構われていて、挙句俺よりも優秀な成績で、運動神経で、世渡り上手で、それが、それが、ずっと、見下してくる。
怖かったのだ。
俺は、私は、怖かったのだ。
その、こびりついた恐怖は、友人と過ごしていても、恋人ができても、拭えなかった。
ヴァギナ・デンタータ。歯が生えた膣。
俺はそれを無意識下に恐れたのだ。恐れたのだ。きっと恐れたのだ。
それに食いちぎられる事によって生じるのは、単純な痛みなどではなく、男としてのアイデンティティと自信と誇りと自尊心の崩壊であって、それが怖かった。
思い出した。
俺はかつて、恋人と、共にベッドに潜り込んだ。たったの一度だけ。生涯で、たったの一度だけ。
怖くて、吐き気がしたから、結局、何も出来なかった。
それが、俺の根源的な恐怖。
両方の、根源的恐怖。
ヴァギナ・デンタータと、社会的規範に服従する恐怖を起因とした精神の対抗として生まれた性欲衝動的なカリギュラ。
嗚呼！嗚呼！俺が何をした！
結局、俺はこの衝動を漏らさぬがまま死んだ！
それで良かったじゃないか！

俺は誰も犯していない！誰も傷つけていない！失敗と叱咤と失望を恐れて挑戦に臆したが！それでも俺は誰も傷つけてなんかいるものか！

嗚呼！嗚呼！嗚呼！嗚呼！！！嗚呼！

ああああああああああああ！！！

クソが！！クソが！！クソッタレ！！

やめろ！！やめろ！

汚い無精髭塗れの口を近づけるな！俺に触るな！！

ふざけるな！ふざけるな！誰も触るな！俺が何をした！俺は何も出来なかっただけなんだ。

消えていく、俺の汚い原初の感情である怒りと欲望が、代わりにまた、あの少女が取り残される。

俺はどうすればいい？

別にどうでもいい、この世界がどうなろうと知ったことか。

いや、違う。

俺は殺すのだ。

本能の証明なのだ。

俺は男だ。俺は男だ。俺は男だ。

男だから、勝利しなくては、支配しなくては、蹂躙しなくては、戦わなければ、生きていけないのだ。

そうだとも、男は戦う生き物だ。

怒りと欲望衝動を飼い慣らして、戦う生き物だ。

だから、競争社会に男などという愚かな生き物が蔓延った。

俺は男だ。俺は男だ。俺は男だ。

子どもなんて産まない。

卵子も卵巣も要らない。

愛なんていらない。

恋なんていらない。

俺はただ、殺すのだ。

自らの恐怖の反動にしがみついて、そのままに、怒りのままに、殺すのだ。殺すのだ。殺すのだ。殺すのだ。

…何を？
何を殺す？
女か？いや、女は違う、守るべきものだ。
…もの？ものだと？女はものではない、男、女などと、性別を大きく括って大きな主語にすることは愚かで馬鹿らしい阿呆のやる事だ。
だが俺は男だから、殺さねばならぬ。
は？
どういうことだ？わからなくなってきた。
悪夢だからか。
これが悪夢だからか。
嗚呼！クソが！畜生！また、まただ！股ぐらから血が！血が！穢らわしい！汚い！血、血、血なんて、血だぞ!?血だ！
うあああああえおおおああおえおあおあ!!!!
俺は、男だ。
しがみついて、しがみついて、しがみついて、こんがらがる。
訳が分からない。
上か、下か、右か、左か。
男か、女か、中性か。
夢か現か。
精神の、魂の残滓の性欲衝動と、暴力衝動。
肉体の、生殖衝動と生理現象。
わからない。
わからなくって、解らない。
怖い。怖い。怖い。
姉が怖い。あの見下して、俺の、俺の唯一の楽しみで、ある意味では存在意義だったゲームを、ゲームを、あんな軽く、雑に、押し付けて、俺がやりたかったゲームでもないのに。
何がゲームだ、クソが、下らない、頑張ればよかった。こんなことになるなら、もっと、人生をハッキリと、しゃっきりと、何でもいいから、頑張ってみれば良かったのだ。
勉強とか運動だけじゃなくて、芸術とか、音楽とか、文学とか、もっ

と、もっと、色々と、色々とあったのに、どうして、どうして俺は、親とか姉とか学校とか友だちとか恋人とかのせいにしてばかりで、頑張れなかったんだ。
もっと色々な道があったのに、結局、幼い頃の恐怖をいつまでもいつまでも言い訳にしていた俺の弱さのせいだ。
そうだ、幾らだって貪欲になれた、勇気を持てた、チャンスがあった、姉に逆らうことも、親に歩み寄ることも、あの時仲違いした友人に声をかけることも、元恋人に復縁を迫ることもできた！
なんだ、全部、自分のせいか。
悪夢は、俺が俺に犯されるのは、当然のことだ。
身勝手で、我儘で、嗜虐的で、自虐的で、自己陶酔的で、もしかしたら或る意味ではこれも、自殺的な衝動。
デストルドーと同居するエロス。
そういった、そういった悪夢は、全部俺が招いたのか。
嗚呼、分かるとも、分かるとも、何故か分からないが、悪夢ってのは覚えていられない。
ここで散々苦しめられて、犯されても、また目が覚めれば、全部全部忘れるのだ。
クソが。
何の為の苦悩だ。何の為の悪夢だ。
整理されたようで、全く整ってなんかいない。
いや、夢ってのは、たしか、記憶だとか、そういう、頭の中の整理だったな。
なるほど、俺はやっぱり発狂していたのか。
どうりで、こんなにもグチャグチャな訳だ。
嗚呼、嗚呼、忘れる。
忘れる。
忘れる。
忘れるのだ。
恐怖も。
何もかも。

忘れる。
忘れる。
忘れる。
忘れる。
もうすぐだ得られる答えすらも。
忘れる。
朝には、もう消える。
そして、また、悪夢が来る。

#15

下半期の中頃、そろそろ期末考査が迫り始めている。
ルーシーの研究室に、リーゼが有志研究の合間を縫って来ていた。
いつもの様に消息子を飲み込んで寝台に寝転がり、胆汁を採取した後、刺青紋章の点検や胆汁の解析をはじめとした、いつもの定期健診が行われた。
そうして必須事項が終了するや否や、大理石で造られた大きくて瀟洒な灰皿が机に置かれて、木箱に入った煙草を取り出して、すぐにスパスパと喫みだした。
それからちょっとして、胆汁の保存が完了したのか、ルーシーが煙草を咥えて、灰皿に近寄った。
「ほい、今月の売上と実験記録」
それだけ言って机にこの前よりも多い即日支払用紋章券と、その帳簿と、用紙に纏められた紙束を雑に置いて、火をつけた。
リーゼはそれらをぼんやりと眺めながら、ペラペラと頁を捲ったりしながら、もう一本、煙草に火をつけた。
灰皿には吸い殻が山盛りで、乾いた独特の匂いばかりだった。
「ほう、やはり『観念干渉』は便利だな、紙幣で買った私兵が幾らでも死兵になるし」
「えらい韻踏んで、詩的やな」
「今のいいな、ベディに教えよ」
「変則的な惚気」
軽口を叩き合って、煙草はもくもくと、紫煙を上げる。
頁を捲る音と、カチャカチャと実験器具を点検している音が暫く続いた後、ふと思い出したように言った。
「そういえば、そろそろ学園長が重い腰をあげた」
「あれま、ほな、あんましデッカい事できんやん」
口調は大袈裟でも、しれっと実験器具を点検する手を止めなかった。それを横目につまらなさそうにしながら続ける。
「少なくとも今までみたいに、学院内で誰かをボコボコにしたり、契約

書を書かせたり、本を忍ばせたり、眼光灯を弄れんな」
「良かったぁ～安牌ばっか切っといて」
「なんだそれ？」
「業界用語」
「はぁ？」
やっぱり軽口ばかりに見えるが、これでも2人は結構事態を深刻に受け止めていた。
暫く各々好きにした後、彼女たちは現在進行している活動（タスク）を、黒板に書きまとめて整理した。
《リーゼ》
○表の活動
・有志研究
・奇数日会の参加
・伝手集め
●裏の活動
・敵の排除・抹殺
・『計画』の進行
《ルーシー》
○表の活動
・個人研究
・私兵集め
・金策
・偵察
●裏の活動
・私兵集め
・取引
・リーゼの健診
・偽装工作
・禁薬開発
《卵くん8世》
・奇数日会の開催

・資格取得
・取り巻き作り
《ベディ》
・かわいい
唐突に、溜め息と共に、ルーシーが愚痴をこぼした。一番下の項目は普通に無視した。
「多ない？ウチだけ」
「そりゃあ有能な奴には多くの仕事を任せるものだろうが」
「はぁ～とんだ指導者様でっせ」
おざなりに応えた後、空いた机にまた器具だの帳面だのを、色々と雑多に並べて、黒板を裏返して数式と図を書き出した。
「お前さんの黒胆汁と王水の反応、最高やったで、まさか結界に引っかからずに人溶かせると思わんかったわ、人間辞めてる人間の素材を好きなだけ弄り回せるのは、やっぱ最高やな」
灰皿の近くに、付箋付きの硝子瓶が無駄に几帳面に置かれた。付箋には色々と効能が端的に書かれていて、しばらく確認していた。
「それで、『観念干渉霊薬』は？更にどうなった？」
「最高、変幻自在に調整可能、…経過発表の捏造ちゃんとしときや、バレたら確定で禁薬指定からの実験監督からの、国営霊薬会社に缶詰めですわ」
「うわっ、想像したくもない」
そう棒読みで呟いた後、煙草を灰皿に押し付けて、また一本吸い出して、それから携帯していた鞄から数冊の仮製本を取り出して、その内の一冊を差し出した。
「なんそれ？」
「聖書」
「……中央正教会とかが認定してる、公式の神竜教の聖書ちゃうよな？」
因みに、『神竜教』とは、オウェル王国の国教である。
『神竜』という唯一神を信仰し、その『神竜』が言い残したとされる教義を厳守する事で、死後に永遠の楽園である『天竜界』に転生するこ

とができる、というのが大まかな概要である。
オウェル王国が建国される前からこの大陸に根付いている伝統的な宗教の一つであり、周辺国でもこの神竜教を国教としている国も多い。
その歴史的背景から数多くの宗派や聖書があり、中央正教会が主張する口伝派（竜言派）や西方教会が主張する原典派（竜書派）などは日夜考古学的、人文学的、歴史的、地理的背景などからの観点から様々な論争が繰り広げられている。
神竜教によって定められた祝日や祭典、道徳観、倫理観、礼儀などは国民の生活に浸透し、それだけでなく、慈善事業、観光事業、教育、食文化などにも絶大な影響力を持つ。
ルーシーは勿論、本心では無宗教なのだが、語学学校に通っていた頃にこの国教がオウェル王国において非常に重要視されている事を習ったので、『それほど敬虔では無いが神竜教である』と装っている。なお、これはリーゼも同様である。
「新興宗教だからな」
「ほぉ～ん……なんか分厚ない？」
仮製本の題名は『聖人教』。
開いてみると、何だか堅っ苦しい文体で、少しげんなりとしてしまいそうになるが、どうにも、にやけ面が横目にチラチラ映るので、仕方なしに読み進める。
内容は要するにこうだ。
聖人教は、『エルヴィス・クロウ』という、かつて神竜に仕えたとされる聖人を救い主（メシア）と信じる新興宗教であり、自らを聖人教徒と呼ぶすべての人々を包含するものである（厳密に説明すれば聖人教は神竜教からの派生宗教という分類になる）。聖人教内には複数の教派、教団、組織、信条が存在しておらず、全て統一されている。聖人教は普遍的な宗教（世界宗教）であり、特定の民族や純人種あるいは限定された身分や社会階層のためのものではなく、すべての純人種に向けられたものである。
なお純人種とは、現在の国際魔法連盟に加盟している国の最も主要

な（つまり、上流階級）人種の事であり、オウェル人、イースタシア人、イングック人、ウーラシア人、華国人、日出人の純血またはその混血の事である。
　この聖人教は、純人種のみが神竜の寵愛対象であり、唯一、魂を持つ、神竜による選ばれし民として、他の亜人種から優先され隔離されるべきであり、他の亜人種は永遠に『天竜界』に転生できず、生まれつき咎と悪を背負った劣等民族であるために、死後は完全に物質世界的にも精神世界的にも消滅する、と主張する。
　祭日や祭典などは、『神竜教』から流用されているが、祭典の参加資格に亜人種は含まれていない。
　更に、亜人種による民院選挙や師院選挙の投票権、立候補権を与えてはならない、とも書かれていた。
　因みに亜人種とは、つまり純人種以外、耳長族（エルフ）、黒耳長族（ダーク・エルフ）、小鬼族（ゴブリン）、豚鬼族（オーク）、妖人種（河童や鬼など）達の事である。
「はぇ～ヤバい宗派やな、何処の思想家の輩が考えたん？それともボロ教会の聖職者様か？」
「自分で考えた」
「は？」
「いや、だから自分で書いた」
「……これを？」
「これを」
「お前、この前の『有用なる私案』といい、本書きすぎやろ、売れっ子作家か」
「結構頑張って聖書の文体を真似て書いた、馬鹿と阿呆は大抵敬虔じゃないから、この程度の『偽典』でも簡単に信じ込んじまう、こんなもん、半分同人雑誌みたいなもんなのにな」
　そう言いながら仮製本をヒラヒラとして振ってみせるその戯けた仕草に、ドン引きしたが、同時に、これは今後の計画を大きく進行させる起爆剤である事には変わりないので、とりあえず、煙草をもう一本吸って、急に見せつけられたブッ飛んだ思想によって構築された代物から、目を逸らして紫煙に耽る事にした。

◆

西ガーヴェニー区工業地帯にある廃教会。
そこには何故か、純人種の子どもたちが大勢暮らしていた。
年齢は様々で、中には既に工場等で働いていたり、少年用職業訓練校に通っている子ども達もいたが、大抵は、幼年学校の生徒くらいの、児童ほどの年齢だった。
ほぼほぼ、赤ん坊に等しい子どもすらも居た。
皆、虐待から逃れた者だったり、捨てられた落胤だったり、事故や事件によって死亡したがために両親が居らず、幼年学校を中退したり、そもそも入学できなかったりした、訳ありの子ども達である。
彼らは本来であれば、行政による救済処置の対象である。孤児院や児童保護施設にて保護される対象である。
しかし、彼らは保護されない。
何故なら、彼らは皆、書類上はとある孤児院にて保護されている。更に、その孤児院に定期的に訪問する職務を与えられた職員は、何故か彼らがそこでどう暮らしているか、について捏造した書類を提出しているからである。
ちなみにその職員は、最近になって急に羽振りが良くなったらしいが、これは余談である。
そんな廃協会には、ある一人の少女が、不定期に訪れる。
子ども達は皆、彼女を『姉貴』と言って慕っている。口調こそ砕けていて、中には揶揄ったり悪戯を仕掛けてくる子もいるが、やはり皆、彼女を慕っている。
ある日、『姉貴』は、とある『本』を、２冊持ってきた。
ここで暮らす子どもの一人、クラン・クラックスは、師院議員の一族であるクラックス家の落胤である。彼の父クー・クラックスが彼の母であるとある女中を孕ました事で産まれた子。その存在は母の解雇によって、闇に葬られた。
その為彼は自身の苗字である筈の『クラックス』を名乗れない。勿

論、戸籍の書類上は『クラン』という個人名のみである。
幼少期から自身の生まれについて、強い心的複合体（コンプレックス）を持っていた彼は、社交と娯楽が嫌いで、神経質で、上昇志向が強く、父に対する憎悪と復讐心があり、内心では他の子ども達を見下しているが為に孤立気味であり、そして、学問に対して貪欲であった。
故に、彼はその本について、尋ねた。彼は読書が好きだったからである。
それに対して『姉貴』は嬉しそうに、にこりと微笑んで、彼の頭を撫でた後、この本について語り出した。それはそれは饒舌に語った。
そうして彼は、禁忌に魅入られた。

#16

１９８４年１０月１３日。雨。

コバックス州セイラムン市アビィゲイル区の住宅街で、１人の男が死んだ。

男の名は、『ウォルター・ブレイク』。

彼は、５年前に結成された『亜人解放戦線』による非合法的政治運動を事前に阻止した、元暴動鎮圧機動隊の部隊長であり、現役を退いた後に師院議員に立候補し見事当選した男である。

最終学歴は、王国立アバー＝ガーヴェニー高等魔法学院を５年生で卒業。

因みに、この学院の学位制度は、３年生での卒業が研師卒で、５年生での卒業が修師卒、７年生での卒業が術師卒と、それぞれ学位が分かれており、３年生以降は２年おきに卒業と進級を選択できる。

修師として卒業した後は国内保全執行局に入局、学生時代に決闘倶楽部に所属し、福部長として務めた経験や、器械体操の大会に選出される程の、強健な身体能力を買われ、暴動鎮圧機動隊に配属された。

若くから機動隊員として着実に功績を残し、それでもなお驕り高ぶらない彼の性根は、尊敬を集めた。

この時期から既に政治に対する興味を持ち、頻繁に図書館や書店に通うようになり、非番の日も欠かさず勉学に励んだ。

趣味は煙草、演劇鑑賞、随筆（エッセイ）の執筆。

特に演劇鑑賞は幼少期からの趣味であり、非番の日の自習の気晴らしに劇場に足を運んでは駆け出しの俳優や女優に食事を奢ってやったり、私金で劇団の運営を援助したりと、演劇を好み発展を願うその並々ならぬ情熱は、多くの人々を勇気付けた。

また、彼の書いた随筆は、何本か出版社によって売り出され、上流階級や中流階級の間で、それなりに話題になった。

公の場では、真っ直ぐで強靭な信念を持ち、毅然とした厳格な態度を崩さなかったが故に、『師院の巌』の異名が付けられ、議会中に白熱した質疑応答が新聞に掲載される事もあった。

彼の政治的信念（イデオロギー）は、保守派。復古主義者である。
更に付け加えると、彼は敬虔な神竜教の教徒で、聖書の内容を殆ど暗記していた。移民や亜人種達の伝統的な慣習や土着信仰を異教又は邪教と解釈している為、人種分離主義的な意見も持っていた。
そんな男が、死んだ。
享年５３歳。独身。
命日の１０月１３日は、彼の誕生日でもあった。
彼の友人達は、突然の訃報に驚愕し、そして悲しみに暮れた。
遺体は、私営集合住宅近くにある自然公園内の、森林の中で、まるで首吊り自殺のように、縄で首を括られてあった。
遺体は複数回の執拗なまでの殴打によって原形を留めておらず、司法解剖によって検出された魔素反応から、犯行の直前まで魔力的毒劇物（禁術指定された、所謂禁薬）による複数の離脱症状が確認された。
遺体の近くには、置き手紙があった。
そこには、教養を感じさせない蚓が這った様な、金釘流の伝言が書かれていた。
『これは、崇高なる復讐である。これは、聖なる闘争である。我ら亜人解放戦線は、我々の人権と自由が合法的に保障されない限り、傲慢にして悪辣なる全ての純人種に報復する。これは、虐げられた全ての亜人種の総意である。』
この犯行声明を受けて、オウェル王国の国内保全執行局は、規格外的な捜査本部を設置し、全国内各地に捜査支部が設立された。
ガバー市、国家の中央であり数多くの要人が住むこの土地も同様である。

◆

学生寮。自室。
今朝の新聞を読んだ。
『ブレイク議員の死』の報道が主であった。
世論が、純人種たちの、亜人解放戦線に対する怒りが渦巻いている。

記者の質問に対し、殆どの人が『法の下で厳罰』される事を望んでいて、中には亜人に対する義憤のあまりに、なかなか過激で排他的な回答すらあった。
有志研究の進捗も順調、下半期の講義も一度だけ出席すればやはり、免除となったので、とにかく暇な時間を過ごした。つまり、それだけ自由に色々と行動が出来た。
一人でほくそ笑んで、図書館で様々な哲学書を借りて鞄に詰めた後に、『とある本』を読んでいると、不意に、話しかけられた。
「アンタ、ポンパドールか？」
少年であった。
目金をしていて、黒い長髪で、肌は褐色であって、痩せぎすで神経質そうな、しかし、端正な面構えであった。
「如何にも」
なんとも無い様な顔をして、返答すると、益々顔を強ばらせる。
「…何故、その『本』がここにある？何処で見つけた」
「この『本』に興味があるのか？」
「いいから答えろ」
予想通りの、簡潔な詰問。
実は、この男の素性や性格や思想を、俺は知っている。
だが、初対面である。
そう、彼は俺の真実を知らない。そして、俺の思惑も思想も分からない。
目の前には、鉄面皮の男。身体つきは細身だが確かに筋肉質で、張り詰めた鋭い眼光と突き出た喉仏から発する低い声。
だが、怖くない。ちっとも威圧されないのだ。
「なんだか長い話になりそうだな、君の名前は？」
「そんなことはどうでもいい！早くその…『有用なる私案』が何処にあったのか！質問に答えろ！」
「そう吠える事はないだろ？それとも、そんなにこの本が、君にとって大きな物なのか？」
飄々と、凪が如き態度に対して、募る苛立ちによって歪む顔貌。

愉快だ。歪む顔が精悍で端正である程。
もう少し遊んでやりたかったが、目の色に疑心が宿る前に、こっちからご案内してやることにした。
「まぁいい、この本は書店で見つけた、欲しいなら案内しよう」
「断る、場所さえ言ってくればいい」
「そうか…ちょっと待て、今手記に案内図を書いてやる」
手記の一頁を破って、簡素な案内図と書店名を書いてやると、引っ手繰る様にそれを手に取って、礼も言わず、強張った顔のまま、肩を怒らせて、早歩きで帰って行った。
彼は、振り向かなかった。
故に、俺の弧を描いた口元が見えなかった。

◆

１９８４年１０月２０日。曇天。
つまり、『ブレイク議員の死』から一週間後。
ベイリング州アバー市ガーヴェニー区で、１人の女が死んだ。
女の名は、『メリッサ』。苗字は無い。
彼女は耳長族（エルフ）で、娼館で働いていた。
最終学歴は、北ガーヴェニー亜人幼年学校を４年生時に中退。自主退学であり、届出理由は成績不振による原級留置と家計の悪化だった。
中退後は缶詰工場の包装係として働くも、経営不振による人員整理によって解雇。収入が無くなり、仕事を探す合間は両親の元で過ごすも、再就職の目処が立たず次第に家族関係に軋轢が生じ、最終的に肉体的な虐待にまで発展してしまった。
その後は虐待から逃れる為に両親の貯金の半分を持ち逃げしカサオ市西ナミナ区に移住、大規模な娼館に就職し安定した収入を得たが、私生活では幾度となく恋仲となった男達に裏切られ、それを原因に精神疾患を患う。
尚、この頃から複数の魔薬を娼館の利用客経由で購入しており、そ

れらを元恋人に融通したり、反社会組織相手に売却したりと、非合法的な活動を始めるも、捜査支部に『魔薬売買並びに所持』の容疑で逮捕され、禁術師及び法違反者収容所に収監される。
刑期を終え出所する頃にはかつて勤めていた娼館は事業縮小しており、彼女は再就職を希望するも却下された。
暫く雑務の日雇い労働者をした後に、公共便所の清掃員として雇われるも、勤務中に公園に屯していた不良少年から暴行（性的な暴行も含む）を受け、心的外傷精神障害を発症し、清掃員を自主退職する。
退職後はガーヴェニー区に帰郷するもこの時点で両親は既に故人で実家は売りに出されていたので、住居を劣悪で粗悪な作りの公共集合住宅に転居した。
そこで彼女は誰も信じず、誰も愛さずに、貯金を切り崩しながら酒食や魔薬を乱用する荒んだ生活を送った。
家族や今まで関わった人々への恨みと幻覚などの精神症状から夜中に叫び声を上げるなどの行動で、集合住宅やその付近の住民からは『耳長の気狂い』と呼ばれていた。
そんな女が、死んだ。
享年５３歳。独身。
遺体は、鉄道線路の付近で発見された。
遺体は凶器の特定が不能な程、非常に酷く損傷しており、特に頭部は遺体から分離した挙句、原形を留めていない程の損傷だった。
そのため事件現場は、現場検証に来た捜査局員の半数以上が嘔吐する程、惨たらしい有様であった。
現場検証後は家宅捜査も行われた。
質素で家具も殆ど無かったが、居間の壁には「生れてすみません」と刃物で彫ったと思われる傷が、大小様々に、壁一面にあった。
これらの事件の一連を、大手新聞社は大々的に報道しなかったが、一部の記者や新聞社によって報道され、亜人解放運動家の耳にも行き渡り、これを機に亜人問題についての議論が白熱するようになった。
純人と亜人の復讐の連鎖は、日に日に、勢いが増すばかりであろう。
そしてその連鎖は、やがて『とある組織の結成』を引き起こす。

その組織とは『純人党』。
それは、『亜人解放戦線』とは真逆の組織である。